

詩 文 學 研 究

第 五 輯

特 輯
ホウドレイルの横顔

1940

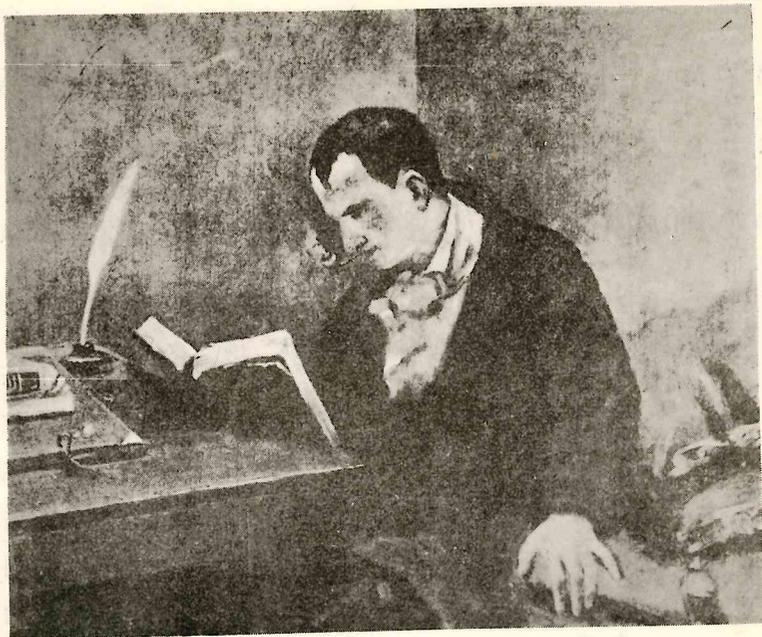
東 京

詩 文 學 研 究 會 版

詩文學研究

第五輯

1940



ボウドレイルの横顔

ボウドレイル詩抄 梶浦正之

ボウドレイルと浪漫派 ボウル・ヴァレリイ

ボウドレイルの繪畫觀 エミール・ベルナアアル

憐愍と苦痛との奢侈 ツルクエ・ミルヌ

ボウドレイルの自己評價 アンドレ・ジツド

ボウドレイル肖像畫（世に才當詩真意） ガスタブ・クルペ

ボウドレイル詩抄

血の噴水

調よき聲にすすりなく泉のやう
時々自らの血が波うち流れ出るやうに想はれる
そのせん、せん、と長く流れる血の音を聞き
あてどなく手は傷を空しく探る

決闘場の態に似て わが血は都會を分けて
舗石道を島と化しては流れゆく
すべての生物の渴をいやしながら
すべての自然を朱に染めては流れゆく

わたしは屢々酒に酔ふ 心を蝕むこの恐怖を
唯の一日でも眠らせやうと
だが酒は愈々わが眼を汚へさせ耳もまた鋭く磨かせる

梶浦正之譯

戀の中に、すべてを忘れる夢を求めたのだが
戀が私に與へたものは、残酷い少女の願望を充す
鋭い針の夜具であつた！

巴里の曙

起床のラツパが兵營の中庭に鳴りひびいて
朝風が街燈の上を吹き初めた

この刻 群がる悪夢をはねのけて
栗色髪の若者は褥の上に寝反りをし、
わななき血走る眼のやうに
燈火は曉の下で赫い汚点となる。
魂は施す術もない頑固な肉体の重荷に
燈と陽と争ふやうに苦しみ戦ひ、

微風に拭はれる涙の濡れた頬のやうに

大氣は消てゆくものの懐きに充ち

男はものを書きあぐみ 女は戀に飽き果てる。

遠近の家々に竈の煙が昇り始め

遊び女らの臉は鉛のやうに蒼ざめ

大きな口を開けたまゝに睡りこむ

女乞食は瘦せさらばつて冷えた乳房を垂れ

乏しい煖を起し凍えた指に息を吹く。

この刻、身にしむ寒氣と窮乏に

産褥の女の陣痛がつのり來るのだ。

咯血の渴いてうなる嗚咽のやうに

時つげる鷓の聲は遙なる靄の空を裂く。

霞の海は立ち並ぶ建物を浸し
頻死の患者は病院の奥に

亂れ喘ぎに臨終の吐息を絞り出す。

放蕩の兒らは倦み疲れ果てて家路を辿る。

薔薇色と緑の衣裳をつけた曉が空氣に顫えながら

人音たへたセエヌの河岸をゆるゆると歩み來れば

ほの暗い巴里の街——この實直な老いたる勞働者は

仕事道具を手に攫む 睡たらぬ眼をこすりながら

異國的な匂

暖かい秋の暮方 二つの眼を閉ぢて

あなたの熱い乳房の香を吸へば

ひとすじに燃える陽の輝き狂ふ

楽しい郷土の岸が浮んで來る

見なれない態の樹木ら 甘い果實ら

しなやかでまた逞しい肉体の男達

そして真から素朴な眼差の女達

それはすべて造化の恵の熟れたる島だ

あなたの肌の香に導かれて美しい國へ行く

そこに見えるは遠い航海にも疲れを知らぬ

港に集ふ帆や帆檣の熾な櫛比だ

緑なす羅柳の香は 大氣を巡り

さらに私の鼻をついて 心の中で

船唄の聲に和唱し來る

踊る蛇

怠惰なる戀人よ 美しききみが肉体に

辰星のごと煌めく

ほの見えがくれす肌を

われは好みて眺めぞつくす！

びりりと辛き香氣を包む

きみが深き髪なる上を

さ青きまた褐色の波立ち騒ぐ

かんばしきその海原を

夜明の風に眼覺めして

港のなかの船のごと

夢路のわが魂は船出の支度

遙かなる空を目標に

甘きも苦きも漏らさざる

きみが二つの瞳こそ

黄金と鐵とをまじえたる

冷えた二つの寶石

拍子に進む きみ見れば

あゝ 氣儘なる麗人よ

手品使が振りまはす杖の先なる

踊る蛇

きみが怠惰の重荷ぞ擔ふ

童子のごときその頭

象の仔に似て物柔かに

ゆらりゆらりと動くなる

身を蹲し臥し倒れ

岸から岸へと漂ひて

帆桁は波間にとらはるゝ

一つの弱き船となる

溶けて雪崩るゝ永河のまゝに

水量ぞ増す流のごと

きみが液体ぞ 齒並の岸に

ふとも溢れて浮ぶとき

苦くもうつゝな浪泊民の

濁酒口にする想ひ

わが心内に星撒きこめて

澄みて流るゝ蒼空よ！

毛 髪

ふさふさと頸の上へ波うちかゝる柔い髪よ！

渦巻く捲毛よ！ 樂しさに耽る香よ！

この夕、髪の裡に うつつに眠り

その暗闇の閨房に充ち充ちたい想ひ

風とともに面布のごとあなたの髪を振りたいたい想ひ！

倦み疲れた亞細亞、燃えあがる亞弗利加

この遠い失はれた國々のやうなすべても

その奥深くには生きてゐる あゝ香しい髪の森よ！

誰かの心が樂の音の上に漂ふやうに

戀人よ、わたしはあなたの香の波に漂ふ

わたしは行かう 彼方生氣に満ちた人と木のある國へ

燃えさかる陽に眩めき倒れるあの土地へ

烈しく捲きあがる髪よ、わたしを運ぶ大波となれ！

黒檀の闇の海原、その胸に藏れるは

帆と船人と、赫い旗と帆檣、それらの綾なす夢だ

響き渡る港、そこに私の魂は飲む

香りと音と色とを 胸いつばいに

黄金の波をうち分け滑つてゆく種々の船は

巨大な腕を開いて抱き寄せる

永久に燃えさかる満き大空の榮光を

陶酔にこがるる私の頭を

他のものが籠つてゐるこの黒い大洋の中へ入れよう

そして揺れ動く波のまゝなる私の妙なる心は

またしても出會ふ あゝ豊饒な怠惰の姿よ

香ばしい閑暇の無限の子守唄よ！

張りつめた闇の天幕よ、緑なす髪よ、

あなたは青い空を 圓く涯なく想はせる

渦巻く髪の束 その柔毛の生まれた岸邊で

私は酔ひ痴れる この油と麝香と

また瀝青との入り混る香氣の裡に

日毎かはらず永久に この重い長々とした髪の中に

わたしは紅玉と眞珠と青玉とを撒かう

わが願望を あなたが頷くために！

あゝ、あなたこそ私の夢の綠泉か また

追憶の酒を徐に味ふ酒壺でもあるか？

ボウドレイルと浪漫派

ポウル・ヴァレリイ

一八四〇年に於て筆を把り得る年齢に到つた一人の青年の位置に立つて見よう。彼は、彼の本能が否應なしに根絶を命ずる人達に據つて育てられるのである。すべて彼等に挑發され養成され、更に彼等の榮譽に刺激され、彼等の作品に決定された彼の文學上の存在なるものは、それに反して必然的に之等の人々を否定し覆滅して之を交替する事に係るのである。この人達にとつては、彼の眼が名聲で空間を充滿させてゐるよう見えたり、または或る者には形式の世界、或る者には感情の世界を、更に或る者には繪畫の性情、或る者には深遠性を、各々彼に喰ひ止めてゐるが如くに見えるのである。何かの僥倖によつて同時代にすべて昂然潑刺の氣を以て比類なくも集合した偉大なる詩人達の全体から、すべてを賭けて秀ひでるといふ事に關係があるのである。ボウドレイルの問題は次の如く提出せられたであらう。否左様に提出されなければならなかつた。それは「大詩人なること、然しながら、ラマンティヌでもなくユウゴウでもなくミュツセでもないことである。」私はこの心意が必ずしも意識的であつたとは思はない。乍然、それはボウドレイルの裡に必然的に存在してゐたし、また同じくボウドレイルの本質的な存在でもあつた。それは彼の本体の根原であつた。矜恃の領域、すなはち創造の領域に於て秀逸すべき必要は生存とは不可分のものである。ボウドレイルは「惡の華」の序文の提議の中で次の如く謂つてゐる。「Des poètes illustres s'étaient partagé depuis longtemps les provinces les plus fleuries du domaine poétique, etc. Je ferai donc autre chose……」(名聲高き諸人達がずつと以前から詩の領域の素晴しき花々を占めて來た。(略)そこで私はその外の事を撰ぼうと思ふ……)畢竟、彼は、彼の心的状態、又は多くの條件に嚮かれ、強要され

て、所謂浪漫主義の体系又は無体系といふようなものに對して次第に明瞭に對立してゆくのである。私は之の語を定義しようとはしない。これを評論するためには、凡ての嚴密な感性を逃失してなければならぬ。ここでは唯、吾々の詩人が同時代の文學と對處するに當つて、「生、誕、状態にあつて、」(à l'état naissant) 確然と把持してゐたと思惟さるゝ反抗と直觀とを再び思ひ起して見ようと努めるのみである。

ボウドレイルは、當時の文學から或る印象を受けてはゐるが、それらを再び組立てる事は吾々に在つても可能であり、更に容易である。吾々は事實に於て、時間の連續と、その後の文學的事象の發展の影響——特にボウドレイルの彼の作品の惠運の影響で——で浪漫主義に關して吾々が有つ處の、必然的な曖昧、平凡な、亦是極る獨斷的な觀念を、僅かながらも精緻とする簡單で健實な手法を所有してゐるのである。之の手段なるものは、浪漫主義を後繼したものを觀察する点に存在してゐるのである。それを變質させたり、それを修正し反對さすもの、更にそれと交代するに到つたものを觀察する点に存在してゐるのである。この以後に於て、これと正反對側に立顯はれ、これが何であつたといふ事に就いて、不可避且つ自動的な明答を成した多種多様な運動と作品とを考慮すれば満足なのである。かく浪漫主義を觀るとすれば、畢竟、浪漫主義とは自然主義が攻撃し、高踏派が徒黨を以て挑戦した處の相手方であり、更にそれと同じくボウドレイルの獨自な態度を決定したものである。それは完成への意志であり——「藝術のための藝術」の神秘主義——事象の觀察と、その非個性的執着の強要、一語に謂へば、「より、確乎たる實質と、より精巧にして純粹なる形式に關する欲求を」(Le désir, d'une substance plus solide et d'une forme plus savante et plus pure.) それと全く同時に自己の敵として發生させたものである。浪漫派に就いては、何よりも、その後繼者の主張と傾向との總体について見る事が朗かとなる早道である。浪漫主義の缺點は、畢竟、自己依存から脱する能はざる無攝生に外ならぬのであらうか？新らしい青年は元氣だ。睿智、計算、亦完成なるものは力を節約する際に始めて出現して來るのである。ともかくボウドレイルの青年時代から考慮苦惱

の世界が始まる。かつてゴウチエは形式の法則が弛緩したこと又は言語の貧困、或は不適當な事に對して抗辯反撃してゐる。その間にはサント・ブヴ、フロオベル、ルコント・ド・リイル達の多種多様の努力が激情の起す安易、詩格の不確實愚昧と奇異の充満などに反對する事にならう……。高踏派と寫實派は、深遠性や眞實性や技巧的乃至知的情性に於て利を得、その程度の外見的強固と豊饒性と又は辯論的な抑揚障害に於て損する事に賛成するであらう。要之、かくの如き多種多様の「流派」が浪漫主義と交替したといふ事は、反省された行爲が自然發生的の行爲に交替したと考へる事が出来るのである。總じて浪漫派の作品は、肩苦しくて訓練された讀者が悠々として全く吞まれてしまつて讀むことは堪え難いものである。ポウドレイルはかくの如き讀者であつた。ポウドレイルは浪漫主義の弱点と缺点とをすべて感知したり、検討したり、誇張したりすることに非常な興味——生死に係る——を抱いたのであるが、それはその派の最大の諸作家の作品中でも、彼等の人格中にも卑近に觀取出來得たものである。「浪漫主義はその頂点に到つてゐる、それ故にそれは死滅すべきである。」(Le romantisme est à son apogée, donc il est mortel)と彼は考へたかも知れぬ。そして彼は時代の神々や半神たちを、一八〇七年頃タレイランとメツテルニツヒが造物主を觀た特異な同じ眼でもつて凝視したかも知れないのである……。ポウドレイルはヴィクトル・ユウゴウを觀察してゐた。彼がユウゴオを如何に考へたかといふことを想像する事は容易である。ユウゴウは嚴然たる存在であつた。彼はラマルテイヌに比すれば遙かに強壯で緻密な才能を以て優れてゐた。彼の言葉の振幅ある音重、彼の韻律の複雑性、彼の投影の極端な豊饒は競走者の全ての詩を粉碎した。乍然、彼の作品は世俗に媚び、豫言的な雄辯や不斷の叫喚手法に無中になつた事も屢々あつた。彼は世衆に卑近し、更に神と對談をしてゐた。彼の哲學の單純、發展の不平均と亂調、細部の微妙に對する含意の脆弱、更に總體的の不確實の頻繁なる對立、畢竟、若い無情な觀察者を怒らせたり、また彼に教育を與へ、彼の前途を個人的藝術へ導き得たもの、これらをポウドレイルは自が肝に銘じて、ユウゴオの魔法の稟性が彼を否應なく讚嘆せしめた事や、それらの作品の有する種々の不純

、浮薄、弱点——換言すると、かゝる偉大な藝術家の摘み残した生命の可能性と榮光の機會とを色別せねばならなかつたのである。若し此處に多少の惡意を雜へ亦多少過度の手捌きを用ひるとすれば、ポウドレイルの詩がヴィクトル・ユウゴオの詩の補足を形式してゐるといふことを指摘しようと考へて、この二人を對比するなどといふことを企てるのは慎に興味を啖り過ぎるであらう。私はこの点を極言しようとは思はない。諸君の知られる如く、ポウドレイルはユウゴオの遂行しなかつた處を探求したのである。彼はユウゴオの追従を許さなかつた總ての効果には手を染めず、自由の僅少な散文から微妙な距離を有する詩型學に戻つて、不斷の魅力の生誕を追求し、既に之に到着したのである。これは或る幾篇かの詩に存在する處の評價し難い絶對的な性質であつて——しかも之はヴィクトル・ユウゴオの數多い作品中には僅かしか發見することが出来ないもの、この僅少で且つ純粹でめる特異な性質に外ならぬのである。その上に亦、ポウドレイルは、晩年の極めて非常な誤謬とこの上もない美を有するヴィクトル・ユウゴウを知らなかつたのである。若し知つてゐたとしても僅少であつた。「世紀の傳説」(La Légende des Sicélas)は「惡の華」より二年後に公にされてゐる。ユウゴオの晩年の作品などはポウドレイルの死後に公刊された程である。吾々はそれはユウゴウの他の詩句にあるものよりも遙かに優れた技術上の重要性を與へるのである。今、此處にその見解を展開する事は適當でもなく亦、その時間も無い。余分な話を述べる事は中止しよう。ヴィクトル・ユウゴウが私にとつて驚異となるものは彼の比類なき生命力である。それは長壽と活動能力の化合せられたものであり亦活動能力を加乘した長壽である。この異常な人物は六十有余年に涉つて毎日、五時から晝まで仕事を續けてゐたのであつた。彼は不斷に言語の構成を求め、それを欲望し、待望して、それらが彼に答へるのを聞いたのであつた。彼は十萬行乃至二十萬行の詩句を書いた。この不撓の修練の惠は一種特別な思考形態を獲得したのであるが、これに對して浮薄な批評家は自分らの程度の斷定を與へたのである。この長年月の間、ユウゴウは撓むことなく自己の藝術中に自己を完成し強化した。しかし、一方では事實、選擇に誤謬の罪を積み、愈々均整の觀念を忘失

し空漠たる眩惑を齎す單語のために詩句の整美を雜漠とした、更に、詩句に深淵、無限、絶對等を夥しく寓さすために、このやうな突飛な用語も、一般的に深淵的な觀を示す慣性を示す語句さへも、その特質を失ふこととなるのである。それにも拘らず彼は晩年にあつて言ふべからざる優秀な語句、その音量、内的組織、共感、充實に於て如何なる詩句にも比すべからざる、何といふ素晴らしい詩句を書いた事であらう。「青銅の思索」「神」「大魔王の晩年」等に於て、亦ゴウチエの死を歌つた一篇に於て、自分の競走者が總て死没するのを見たり、また自分の弟子に一代を示す詩人達を生んだ事を見たり、更に、その上、弟子が先生に、若し先生があるならば教へ與へるであらう深淵な教旨を利用することさへも可能だったのである。この老齡の藝術家、名聲高き老人は詩的力量と詩作家としての高貴な蘊蓄との最高峰を極めてゐるのである。ユウゴオは常に實踐に學ぶことを努めた。その壽齡に於てはユウゴウの半齡を梢々超へるに過ぎないポウドレイルは、彼とは全然正反對の方法に據つて自己を發展させたのである。彼の短き生涯、確乎と思惟される薄幸、豫感し得る不足などに、前述したとき批評的知性の使用に依つて、これを補はねばならなかつたとも謂ひ得る。彼特有の完璧に到達し、彼の個性的領域を認識し、彼の名聲を負擔し、更にこれを守護し得たであらう。この特有の形式と形態を確立せんが爲めに(註)彼は約廿年を要した。彼は文學的意志の麗しい標的を、多數の實驗と作品の生産とを基として、ゆつくり追求する時間もなかつたし亦そのやうな時間を有する事もなかつたであらう。最短距離の徑を辿り、模索の勞を努めて約要し、繰返す言葉、複雑な意圖は略かねばならなかつた。それ故、分析の方法に據つて自己は何ものであるか、自分は何物を欲求するかを探求し、更に自らの裡に、詩人たる自然發生的力量に、批評たる慧眼、懷疑性、考慮、推理の機能などを一致させねばならなかつた。これこそ、ポウドレイルが系統的にも浪漫派であり、更にその趣味に於ても浪漫派であつて、もしか屢々古典派作家の倂をしのばしむるものがある所以である。 (「ポウドレイルの位置」より)

註 (Je te donne ces vers afin que si non nom Aborde heure usement aux époques lointaines...)
われは、この詩を君に與へむ、いつの日かわが名の遠き世の岸邊に辿らむためなり……

ポウドレイルの繪畫觀

エミール・ベルナル

ポウドレイルの評論の中で重要なものは、ウウジエヌ・ドラクロウの辯護である。この偉大なる畫家への彼の賞讃の想は非常なもので、この畫家の壯重な口より述べられる繪畫に關する理論の外は殆ど聞かず、更に時折は全然この畫家の意見に自己を忘却するといつた状態であつた。このやうな雄大でありながら尙社會に好評を得ない創作に關する彼の正しい鑑賞、それを以て彼は自ら妥當と信する論證、すなはち之の制作を型造り、組織化した處の意志から生誕した論證を自由に示したのであつた。この畫家のアトリエへ屢々出入してゐた彼は、全く無條件に彼を讚美した。彼はこの特異な知性の特性ある鋭敏な天才に就いて詳細な事象に迄も深く見極めてゐたのである。ポウドレイルが一八四五半始めて彼のサロンを催した時はドラクロウの名義に依つて行はれた。彼はそれに次の如く書いてゐる。「ドラクロウ氏は決定的に古代及び近代に於ける最大の獨想的畫家である……」

一人の年若い天才が、一人の圓熟完成に到達せる天才に對する情熱、相互の親睦を感知する優れたる性質を有せねば發見するを得ない情熱、更に現代藝術の天空に二つの星が邂逅せる状態を崇拜すべき處の情熱、一八四五年のCのサロンに於てポウドレイルは、特にこの偉大な畫家の出陳した數点の繪に關して述べた。その繪畫は「荒野のマグダレナ」「マルク・オウレリスの最後の啓示」「黄金の枝を捉へた巫女」「衛兵と士官に護られたモロッコの酋長」であつた。詩人はこれらの繪畫に色彩の完成せる調和と優秀なるデッサンが存在するを明瞭に示し、「これぞ、線畫家の繪に非ず、色彩家の繪なり」更に、この繪畫中のすべての部分に天才が充滿してゐると述べてゐる。

相當の期間に涉つて社會の狀勢、批評の事、また浪漫主義の事などを考慮した後、彼は亦もドラクロウの名義に於て一八四六年のサロンを開始した。ポウドレイルは其時、「ダンテの船舶」なる繪畫に就いてテイル氏の書いた論文を引用した。この論文は一八二二年に書かれたもので非常に著名なものであつた。彼は再三、優秀なる人物には年齢が存在しないと述べた。その當時テイル氏は廿五才、ドラクロウは廿三才であつたといふ。更に彼はこの藝術家の經歷を述べ、この人は不斷に自己の人格を啓蒙し、一作毎に完成へと進み向ふ人であると斷定した。ポウドレイルは尙謂ふ、ドラクロウが著名となる以前に當時美術長官であつた、サステイヌ・ド・ロッシュフコ氏が、彼を呼んで「自分の葡萄酒に水を割らせよ」と命じたといふ、その時は彼は斷乎として拒否したため七年の間不遇せられたと云ふ挿話をテイル氏は一八三〇年に到つて再び引用して「グロウブ」誌上に「新奇な讀物」と題して書いた。モロツコへの旅行は彼に「猶太人の結婚」と「アルジェルの婦人」をものする想念を起させ、色彩畫家としての教養を完成せしめるに及んだ。テオフィル・ゴウチエ（彼も亦この畫家の保護者であつた）は、その著「浪漫主義の沿革」中に次の如く謂ふ。「どんな騷々しい境地に、またどんな鬭争の塵埃のなかにドラクロウが生活してゐたかを能く想像出来るものはないであらう。彼の創作は、絶えず喧騒の聲と憤激の聲と狂暴な論争とを惹起した。人々はこの藝術家に向つて盜賊や殺人者に對する如き罵倒の言葉を浴せた。何處にも優しい批評などは彼にはなかつた。……當時學士院アカデミーから選拔された審査員は毎年彼の作品を二点必ず落選させて氣焰を擧げてゐた。今日尊重されてゐるドラクロウ氏の繪畫が、その當時は若年者の下手糞な繪と同じく侮蔑的なRといふ落選カウセの記號文字を繪背につけられて返送されてゐたのであつた」予がこの挿話を一つの證明として掲げたことはポウドレイルの批評の熱烈な情熱が何よりも可きものを了解させ得たことを示すためである。ある優秀な天分ある人々を不遇する不公平、それ程熱烈で且つ勇猛な辯護者を奮起せしめるものは他に無いのである。讚美の度を過ぐるは、全く罵倒の度を過ぐる賠償をなすのである。

一八四六年に到つても、この黨派の喧騒は浪漫主義が勝利を得たが尙靜かにはならなかつた。もと／＼天才のうちには攻撃者の憎惡を誘發し、しかもそれを解消せしめない不思議な傾向を有してゐる。天才は不斷の刊罰であると謂はれてゐるのであるが之は全く眞理である。ポウドレイルはドラクロウを守護する爲めに一八四六年のサロンに於て彼に集つた凡の惡評を引出した。「假に彼が何か優れたものを制作したとするならば、それは單なる偶然の結果に過ぎないであらう」かゝる人々の批評に對してポウドレイルは應へて「一個の繪畫は一個の機官である、その機官の組織が自然と明瞭になつてゆく。それ故、その繪畫が優秀であれば、すべての部分は存在の理由を有してゐる」と謂ふ。「あらゆる偉大な畫家が苦しめられた枷の下に同じく苦しめられた」ドラクロウの作品の中に偶然が存在するか否かは問題にはならなかつた。如何なる人と雖も、彼位、合理、論理、秩序、調和の奴隸となつた人はなかつたであらう。彼の作品は藝術の凡ての部分完全へと導く明確な意志の結果したものである。ポウドレイルは、この畫家が如何にして自然を活用したかを誠意を以て述べ、さらに吾々がこの畫家の「日記」から讀みとるを得る處の理論を展開したのであつた。即ち自然は辭書であり、想像は人間であり、追憶は理想を造るといふこと等を述べた。線や色彩は、ともに藝術家が各意圖する儘に自の思想を表現するに使ふ抽象性であると斷じた。寫眞的のデッサンといふものはアングル等のデッサンであつて、天才のデッサンこそこの畫家乃至その外の色彩主義のデッサンである。ドラクロウの繪畫が靈魂の土台の上に創造された効果を述べて後、ポウドレイルは「菜園のサン・ルイのピイタ」に就て次のやうに書いてある。この傑作は精神の裡に深い憂愁の跡を示してゐる。加ふに「サン・セバチアン」と「橄欖山の基督」は宗教繪畫についての彼の造詣深い力を證してゐる。彼の才能に於て眞劍に悲哀であつたことは「世界の苦惱の宗教」を完成創造したことであつた。ドラクロウの偉大な効果の一つは既に忘却された藝術の衣飾デコラツィオンを了解したことである。彼は偉大なる問題を解決した「彼は色彩主義である彼自身の位置を揺がすことなく、形態の裡に統一を發見した」この点に於て彼が優れてゐたことは代議幹院やリユクサンブル圖書館等でも

保證してゐるのである。一八四六年のサロンへドラクロウは「ルベツカの占領」「ロメオとジュリエットの離別」「教會のマルゲリット」と水彩畫「獅子」を出陳した。ボウドレイルは、これらの制作に就いても一言して、この畫家に對して敵意を抱くものは大衆ではなく畫家達自身であるといつてゐる。更に最後に彼は追言してゐる。「この論稿の修了するに當つて、殘されてゐる問題は、ドラクロウの性質中の最後のもの、全ての中で最も偉大なるもの、彼が十九世紀の眞實の畫家たるもの、等を示すことである。それは彼の全作品中に顯はれてゐる特異なる憂愁に外ならぬ。それは題材やポーズの表現や動作や又は色彩の形式に據つて明瞭に示されてゐる」。

ボウドレイルは、現在吾々が見知してゐるように、近代藝術を快活な形態に於ては創造しなかつた。この事實を目して多くの浮薄な作家達は非難の理由があると信じてゐる。しかし不斷の烈しい事象の壓力の下にあつて、更に不斷の勝利的な並行の壓力の下にあつて、誰か今日、そのやうな愚劣、空虚な徒事をするものがあらう。快活なる畫家こそ憐愍すべきで、彼等には藝術は解らないのである。ボウドレイルは尙謂つてゐる。「總体的にドラクロウは所謂世俗的な美しい女を描かなかつた。その畫く女の大部分は病めるもので、そして各々の内部的な美しさに溢れてゐるものであつた。力といふものを表現するのに彼は筋肉の隆々たる態にのみ據らず、神經の緊張に據るのであつた。彼が得意に描く處のものは唯單に肉体の苦惱のみでなく、特に心の苦惱——驚異の神秘——にあつた。……ドラクロウが藝術の進歩の最後の表現者偉大なる傳統の襲踏者であると思はれる所以は、この眞の近代的な新性格に外ならぬ。彼は古い畫家達よりも一層高度な苦惱、情熱、動作に關して徹底してゐた。これが彼の偉大にして且つ重要な点である。(「ボウドレイルとドラクロウ」より)

憐愍と苦痛との奢侈

ツルクエ・ミルヌ

幾多の哲人達は之の奇異なる精神状態、苦惱者が自己の苦惱を解剖する事を樂しみ、また心から耽美するといふ奇しき精神状態に關して論じてゐる。これらの評論の中で最近のものはハアバート・スペンサーで彼は「心理學」の第二卷の中に、それらの感情を解剖して之を「憐愍の奢侈と苦惱の奢侈」と名づけてゐる。いま此處にその一端を示して見よう。しかし吾々は、このスペンサーの見解も一定の場合に於てのみ妥當であつて、彼が若し「アドルフ」(譯者註、バンツヤマン・コンスタンの戯曲で、戀人を執愛しながら且つ彼女に苦痛を與へて之を耽美するといふ戀愛悲劇)を讀んでゐたならば、彼はより一層完全な見解を與へたであらうといふ注意を一應述べて置かねばならぬ。「憐愍の奢侈を經驗する凡ての場合には、憐愍さるる人が病氣又は何らかの不幸に依つて無能者をして、かゝる愛情を喚起せしめるやうな状態へと導き入れた場合である。かゝる場合、共感が生ぜしめる苦痛の意識は優しい情緒が構成する快よい美意識と結合するのである。この見解の實證は、それが據つて以て生じた種々の解釋に依つて示されるのであつて、例の「憐愍は愛と同じなり」なる言葉は嚴密に謂へば眞理とは斷言出來得ない。この二つのものは全く本質的に相違してゐるからである。更にこの二つに就いて、憐愍が愛情を喚起するに充分なる程度に迄結合されてゐるといふのは前述した普遍的眞理の各部分を構成してゐる眞實である。憂鬱な小説を讀んだり、悲惨な演劇などを觀て快感を受けるといふ事實も同様に余り珍らしいことではない。かくて吾々は、恩恵を與へる人が、被恩恵者に對して、その被恩恵者が恩恵を與へた人に對して感ずる愛情よりも、尙それ以上に愛情を感ずることも屢々あるといふ、外觀的には一種の變則な心理を識る事が出来るのである。總体的に吾々はスペンサー

に賛同であつて、彼の解説で以て一應は満足してゐるようであるが、アドルフを考へ到るとき、吾々は之の解釋もすべての現象を包蔵してゐるものではないといふことを識るのである。アドルフは本質的に利己主義者であり、バンジヤマン・コンスタンは憐愍の利己的快感を享樂したのである。自ら感じてゐる愛情を抹殺することに努力してゐる男、即ち自己の愛に溺れつゝその愛情を抹殺しようとしてゐる男、さらに進んで「彼が愛する彼女に會ふを得ないその憂慮から來る熱病」に自ら陥ち入る男、絶へまなく自らを解剖してゐる男、悲哀のために悲哀を愛し、憐愍の奢侈と苦痛の奢侈とを同時に享樂するこの男を観るとき、吾々は之等の諸現象に關してはスペンサーとは始ど無關係な解釋をすら與へたいのである。

先づこれらの現象を説明する以前に、吾々はこれらの現象が世上に能く知られてゐるものであり、さらにアドルフのみがその解剖を行ひ、最も驚嘆に値する要領で以てその解剖を遂行し得た事を認識せねばならぬのである。手取り早く、この現象を吾々の日常生活の經驗に就いて見ることにする。吾々は、吾々の親類中か又は友人中に、自己を苦しめることに據つて自らの欣とする輩のあることを知る。亦吾々はそれらの人々は絶えず何か悲哀を啣つ言葉を有つてゐなければ、眞に幸福ではないやうに見える人々がゐる事をも知つてゐる。吾々はさらに、それらの人々が憐愍の心が常に僅か乍らも親しい友の不幸の中でさへも、吾々を不愉快に感ぜしめない何か存在する」と謂ふ。さらに、このラ・ロツシユウコの思考はトルストイがその「回想記」に於て一少女に關して述べた次の言葉と比較されよう。「私は何かしら彼女の嫌がる事を言つたり爲したりして見たいといふような堪え難い欲求を感じた位彼女を愛してゐた」

吾々は亦、シェレイの言葉を引用して見よう。彼はその著「詩歌の理辯」の中で述べる「悲劇は苦痛中にある一抹の快感を生誕せしめる事を以て欣とする。これは更に同様な極めて快よい旋律には必ず憂鬱が隨伴する原因である。悲哀中に存在する快感は、一般の單獨な快感よりも一層耽美である。それ故に「喪の家へ行くことは歡びの家を尋ねるよりも佳だ」

といふ諺がある。」そして吾々はアルフレッド・ミュツセの叫びをも回想する。「吾々の心中に不幸を受する何ものかが存在するといふことは何たる不思議なことであらうか？」

以上の例に依つて見ても、この現象が世上一般によく識られてゐるものなることは了解出來得よう。これ以上の例證は裁判所の記録書に就いて見るが宜しからう。單純に相手の苦痛を享樂せんがための自らの愛人を傷害した人間の實例などはいくらでも見出すことが出来るであらう。かの有名なジオオジ・セルウィン——ヴィリエ・ド・リイル・アダンの「最後の晚餐の相伴者」の生々とした顯現——なども亦同じ現象の例である。

扱て吾々は之の現象を如何に説明したらよいのであらうか。吾々の靈魂が必ずしも不變なものではなく發展と變遷との余裕が存在する如く、吾々の心情も亦一大戰場であつて、其處には吾々のすべての感情が相互に滅亡せようと相尅してゐるのである。アドルフにあつては——それは誰でも同様であるが——多種多様な精神状態が相戦ひつゝあるのである。アドルフにとつては愛と憎とが同一である。それは吾々に於て善と惡とが同時であると同様である。バンジヤマン・コンスタンは愛しつゝ若惱してゐるがこれも全く當然である。愛は吾々に最も明瞭な事實に對してさへも疑問を抱かしめるからである。愛はまた、その愛自身に對しても疑問を生むが故である。アドルフが、その若惱中の快感にふけること、彼がそれを解剖すること、彼がそれによつて歡樂すること、彼が愛すると同時に直ちに亦憎惡すること——これらすべての心理は、全て人間の精神状態をして正確、不變なものには非ずとなす見解を有する心理學者の眼識に懸れば充分に明瞭となるもので余り珍奇な状態ではないのである。最も普通にある例を擧げて見ると、ここにある悲惨な劇の演出が吾々に快感を與へるとするならば、それは吾々が、その光景が自分らに對して示す再提出が、吾々の精神の全活動を停止する迄に到らないが故である。停止する迄もゆかず、それらが精神の他の状態と相尅してゐるからである。さらに、その鬭争の接戦の音が調和を作り、その調和が吾々に苦痛中の快感を覺えしめるのである。 假りに、實際上大きな悲哀の結果が——例

〜ば吾々の愛する何人が死に到つたといふ如き大きな悲哀——精神の全活動を停止するとすれば、その時には其處に眞實の苦惱が存在する。そこには既に、何らの争闘も存在しないからである。それと同様に大なる愛、死以上の強大なる愛に於ても何らの争闘がないのである。愛が主体として臨みつつ一切の他の感情を滅亡して了ふからである。

吾々はいま一度繰返し謂ふのであるが、憐愍は必ずしも恒に博愛的なものではない。ルックリイシアスの有名な "Suave mari magno" (大洋に風吹き荒れ、波浪吹え狂ふとき、陸より人の苦戦する態をながむるは何ものよりも楽しい。) といふ詩句は、快感と苦痛とが混濁した複雑な感情に於ては、吾々自らの中の争闘が如何ばかり大いなるものなるかを指摘してゐるのである。悲哀は心内の慣性を攪亂しようとする、靈魂の靜寂を破らうとする、そしてそのすべては成功し得ないのである。その結果する状態が吾々に耽美の快感を與へるのである。それが藝術家であらうと、普通人であらうとすべて感覺が鋭敏に訓練された人間に於ては、これらの感情の反射作用に依つて殆ど倒錯と思はれる程度に微妙な状態へと導かれてゆくのである。そしてポウドレイルの多くの濟輩が之に逢着し、またポウドレイル自らも度々體驗し味到した現象は之に外ならぬのである。このやうな複雑多岐な感情間の境界線は、恰も著作者が國境を越えないで濟すことが出來得ないと同じように、全く捕へ難いものである。(「ポウドレイルの影響」より)

ポウドレイルの自己評價

アンドレ・ジツド

他の方面に於て異常に鋭敏であつたポウドレイルも、彼自らの價值並にその價值を形成するものに關しては、多少の誤謬なきを得ない。不斷に意識的といふ程ではなかつたけれど、彼は時代の裡に彼自らを孤立させた誤解に努力を拂つた。

その誤解が早くも彼自身の裡に生誕した程、彼は之に大いなる努力を致したのである。歿後發行された彼の内的記録はこのことを悲痛に明瞭とした。ポウドレイルは自己の本質的な新鮮を確認してゐた。乍然、彼は之を自分で完全に定義することが出來なかつた。この類例なき藝術家さへも、自らを語る事に到つては馬鹿らしく下手糞である。彼は救ひ難い迄も自恃を失つてゐる。それが愚劣な人々を驚嘆させるため、又は擧蹙させるため、乃至は全然彼等を無視し、明らかにさせるためであつたとしても、ともかくも彼は彼等愚劣な人々を常に腦裡に考へてゐた。「本書は私の女友達、娘達、又は姉妹達のために書きしものに非ず」と「惡の華」の中で彼は謂つてゐる。このような事を吾々に言明する必要は認められない。何故にこのような句を謂つたのであらうか。唯ゆくりなくも語られたこの「私の女友達」といふ言葉を以て俗人の道徳を無視するといふ歡樂の爲に外ならぬ。これは平凡な言葉ではあるが、この言葉には相當彼は懸念してゐたといふことを證するには、今一度、彼の日記中にも「これは私の女友達、娘達、姉妹達をも嫌惡させることはないであらう」なる文句が出て來ることである。ポウドレイルはこのやうな馬鹿々々しい虚構の彼岸に自らの熱情を被ひ得たのであるが、彼の初期のある種の讚美者共が、この虚構自身に夢中歡喜すればする程、反對側の讀者の不愉快はつて行くのであつた。ポウドレイルは、かゝる種類の讚美者から特に避難すべき必要を感じた。かゝる方法は浪漫派の常套手段と同じく、人々は彼を完全に排斥したと思つてゐた。……彼は再出現して來た。顔料をとり、若返つて。結果に於て、彼は當時よりも現今の方がより一層よく理解されるやう行動したのである。今、彼は聲低く吾々のすべてと言葉を交すのである。そこに彼の力を確認する事が可能であるが、彼は讀者に對して或る種の是認と協力に似るものとを要求し獲得するのである。「何よりも先づ彼は懺悔所にあるが如き靜かなる調子で自己を語り、何の啓示をも受けた態はなかつた」とラフォルグが謂つてゐる。ポウドレイルがラシニヌに似てゐるのは此点である。ポウドレイルにあつては、言葉の撰擇が非常に重要で、主張する處も、その聲の響も亦頗る微温的である。コルネイユ又はユウゴオのやうに出來得るだけ聲響を息吹へ取り込む代

りに、ラシイヌやポウドレイルは低い聲で話すのである。このやうにして吾々は彼等の言葉に徐々として聞き惚れるのである。このもの靜かな唄に心から聴き入るとき、彼をなつかしむ心が、いつしらす深い誠意をそこに見出すのである。ポウドレイルの對照法は、ユウゴオのやうな技術的な唯外面的な言葉の綾ばかりではなく、内部の矛盾から生誕して來たものなるが故に眞實である。この對照法は彼のカンリツク的精神の裡に自然と生誕したものである。このような靈魂こそは外廊が忽ち消滅して陰影のやうに、否、彼の心内の二重性の裡に反映するやうに、その反對物が忽ち二重となる如き感動のみしか識らぬものである。そして彼の詩句の凡ての部分に於て歡喜と苦惱、疑惑と信心、憂悶と快活、等が各々混じ合つて存在してゐる。まだ更に彼は心痛しながら恐怖すべきものの裡に愛の赴くべき方向を求めるのである。

乍然、ポウドレイルの苦惱、更に亦靜かなる性質のものである。……外面的には、ここで私は彼の詩から遠のかうとするのであるが詩人の靈魂を他所にして、かゝる眞正な旋律の言葉と聽書とを何處に求め得ることが出來ようか。人間の裡には新しいものは存在しない、といふ言葉は屢々述べられた。それも眞理であらう、乍然、人間の裡に存在する凡てのものが既に悉く發見されたのではない。私は感動しつつ自らの心を信する、發見すべきものは未だ無數に存在すると。そして吾々は、それに従つて判斷し思考し行動もするので、否、今日迄、その様に到着した古い心理學の枠枷は、ラジウム發見以前の古い化學の枠枷よりも人工的に見えて、何らの効もないと想はれる時期が來るであらう。化學者が今日既に原子の壊滅を述べるに到つた刻「吾々心理者」も單純な感情の分解を目前に試験せぬといふ解があらうか。單純な感情を信じ込ませる方法は感情考察の極めて素朴なものである。各部の個体をして、その各個体自身との一致を繼續させる凝集力、それに據つてスピノウザが「各部の個体物が、その所有するものに執着せん」とする力に對して、各部の個体がこのことに依つて分裂したり、遊離したり、危険を襲し、嬉々したり、更に消滅しようとする如き遠心的且つ分裂的な力も存在せねばならぬ。この力を、例へばドストエフスキイの如く明瞭にポウドレイルが透徹したのであると斷言するに到らな

いまでも、彼の日誌中の或る句を讀む毎に、體驗の實證と恐怖の戰慄を感じずにはゐられないのである。「生産的集合の嗜好は、成熟した人に於ては消耗の嗜好と變化すべきである」——或は又、「自己の蒸昇と集合、この裡にあらゆるものが存在する。」——更に亦「すべての人間の裡には、如何なる場合にあつても同時に、擡頭する（この語句の中にこの句の總ての感興が存在する）二つの祈願がある。その一つは神への祈願、他の一つは惡魔への祈願である」——これは、舊い理論、法則、靈魂の慣性、自負心、それら總てのものが、これに接觸すれば蒸昇せねばならぬやうな無限に重要なラヂウムの痕跡ではないのだろうか。彼の散文の著述に於て、私が描き出した、この三つの斷片語のみが、それであるとは謂へないとしても、この痕跡は、彼の詩作品の總てに於て認識し得ると斷言出來るのである。以上の如何なるものを以てもポウドレイルは吾々の賞讃に比類なき藝術家とすることは出來ない。むしろ反對に、これらの總てのものを以てするとしても彼がかくの如く確乎たる藝術家に他ならぬことを失はぬを讚嘆せねばならぬのである。サント・ヴウブの沈黙の代りとして吾々を慰安する立派な論稿の中にバルベイ・ドオルビイリイが嚴として謂つた如く「藝術家たる彼が敗北し去らなかつた」のである。

（一九一七年版「惡の華」の序より）

雪 便 り

木 村 茂 雄

鴉ガ動亂ノ雲へ慄へナガラ
苦シサウナ咳ヲシテ
厭ナ夢ト共ニ消ユル
空氣ノ精ハ清淨ナ肉體ヲ
微妙ナ樂器ニ合セテ
輕イ扇ノ舞ヲスル
子供ヨ
部屋ノ窓カラ笛ヲ吹ケ
鬼ノ耳ヲタテヨ
絨緞ヲ轉ロバセ
唇ヲ開ケテ乳ヲ舌ニノセヨ
ピアノノ紅茶ヲウツ語ヒモ
温タメラレテ

指先ノ夢ガチラチラスル
蘇生シタ黒裝束ノ乙女ガ
馬車ニ乗ツテ
軀カラ撤カレル想ヒヲ拾ウトハシナイ
斑ナ猫ガ走ル
お喋リノ光ガ騒グ
山々ハ威嚇ノ拳ヲニギル
剽輕ナ街ハ
心象ノ翔ケテユク空ヲ仰ギ
襪布ノ外套ヲ搔キ合セル地面ニ
遠イ跡形ノ封筒ヲ埋ム
舗道ノ告白ハ

吼エダス火ヲミツメ
腫デ生ヲ嚙ルガ
飢ハ愛ノ芽ノ膨ラミノ側デ
地熱ノ胎兒ヲ知ル
オ、
一本ノ蠟燭ニ映ル
青キ肉体ヨ
肩ヲスポメ
年齒ニキキ耳ヲタテル唄ハ
純白ノ舞踊ニ

説

せつないまでに匂やかな
ひととき 縞目の深い金色の花粉が輝つたので

山 路 青 佳

青い格子の明暗は その裾で
かれんな蝙蝠たちをたちまち孵化へらせた

詩集△奇妙な街▽ノ一ノ街より

青 春

逮夜の章

あるとき

蜻蛉の葉脈に沈んでゐた 何處かの山部の假睡であつた

のか

葦間の流れた柔い乳白の 濁りを知らぬ――

そしてひとりの去つたあと

赤い鐵橋のその上を かすかな風鈴に似た

黄昏色をひゞかせながら

われよる空に描きしは

A

――そのむかし 太古の夜は

リアリステイックに更けて行つた――

濡れてつと光るのは 頂を垂れた赤い葩びらの揺れでは

ありません

みんな度しいそのやうな追憶に似た鬚たちです

ほそぼそと烟るあれは霧の雨――

あゝいちやうな 蒼い夕のその底の

静謐な 懸命な 古い音色の一律です

それらしめやかな衷なるものさゝめきばかりです

――永瀬愛子氏に――

B

竹 内 は じ め

楽しいカアテンだ

なんだかうすぼんやりと透いてみえるやうで

こころにたより胸にもたれ

狭くるしい絹の階段を昇り切つたとき

しんじつを秘めほのかに匂ふくらやみのなかを

甲斐なくまさぐる

一本の指をすら信ずる術はないものか

忘れはせぬ

はじめて少女の襟のレースのしろくうつくしい切線が

人のねさけに濡れた夜は

低空飛行のスリルだつた

E

うれしい鞭ではなかつたか

逆上の橋はたたちに反駁され

月のない空にぞ坐る幾星霜

――時間と空間の障害を越えて

ああ 愛するが故に責めねばならぬ――

し切られた向うの部屋を
少女は新しいエプロン掛けて
お掃除してゐる

C

季節を問はない

なつでもふゆでも

人間は休暇のときに

愛情についてひどく遊戯的になることあり

そのエア・ポケットには墮ちるなよ

場所を問はない

山々に涙あふれ

溪流の素直な抵抗のまま

笑つてよいか泣いてよいか

いやにしめつぽい鼻だつたぞ

D

病 床 日 誌

小 松 茂 彦

けふも慰問の女らは病室を飾つたりした

水仙 シクラメン 櫻草――

風が流れてくる やはらかい風が

ときには雨さへこの手を若芽いろに染めては過ぎた

またしても遠く射する練兵場の空砲

痛むのは傷ばかりではない

もういく月

見る夢はいつもきまつてゐた

吼える火網

しきりに血漿をとかしてゐる水

お 柘榴いろのお前の肉片

ぐつとさかさまに旋廻した焰の地平線

夢は窓をくぐつてひそやかにとまる

かなしくけむつて病床の袖に

かさねられた毛布の襞に

風がながれてくる やはらかい風が

頬をしめらし胸をふるはせ

いつしかこの手もこんな若芽いろに染つてきた

――昭・十四・三・十一――

透 明 な M U S I C

清 水 達

クリーム色の幸福の裡に

碧い少女は跳びはねながら

海の灣曲が好きよと言ふ

そして

静寂んだ秋の色彩に生き

ポプラの歌を歌ふ

△ 神話でのやうに 魚のやうに姿かたちをくねらせ
僕の夢に入る▽

海の望める高原には

繪畫えいさよりも美麗うつくはしいひとの聲がきかれ

透明なMUSIC

上氣しはじめる少年の胸

あらあらしい呼吸

ふるへやまないこの歡喜よ

おお

おお

おお

追つてごらん

追つてごらん

追つてごらん

旋廻し 跳躍とよび 走驅はしり 笑ひ

碧空そらに逃げ

波に隠れる

秋の階音

動物園

桑門つた子

ベリカン
モンキー
梟のウイंक

さても陽が逆さまに這入りこむ平地に
腹の太い罎が檻の餌を狙ふ

こゝは晩秋とはいへ
これから燃えようとする季節

—— 疲れたひとびとよ
—— パラソルをかくげて何から逃れようとする

さえた体臭
開かれたままの腫球
おどける

笑ふ
地中の垢を悉く掘り出さうとあせる
ごつたがへしの聖餐に終生を賭けるもの。

訣別

この夜ひそかに
別れのでいぶを切る
香り高い鶴よさゝえやらす
まぎれ飛ぶか

ぬぐへど曇りいえぬ
玻璃戸の戯書
花ふんで泣く幼児の
うすい悲みに似て

海鳴は今夜の雪に
コロココロンと冴えた音楽時計を置き
別れを告げるあなたのうえに
遠い榮光も在る

しづごころを掌てのひらにのせて
世のこの常の五彩のていぶを

雪の降る夜です

— S O K —

しんしんしんと雪は降り
雪の降り積る夜です
それはかつて
雪の中でのそのように
夢の中での感傷ではなく
—— あかくただれた眼

奈良進

反逆に疲れ
きりきりと風の刺す霜の朝を
北國へ歸らねばならなかつたあいつの
生きてゐるたましいの傷は
あいつはどうしてゐるであらう
荒んだ生活には

深い港の水になげた

あからんだ歌聲にふるへ
あなたの頤をうづめる愛情を
刺して
粉雪はふる。

パンよりも温かいといふ接吻――

あいつの唇には

紅い血潮が咲かねばならなかつたのだ

――ながい苦痛の酒と藝者

そしては首ひかけた眼に

はつきり映つた藝者の死顔――

あいつははげしい自虐の底から

おれは生きるのだ！と

すすり泣いては

すすり泣いては叫んでゐた

しんしんと雪が降り

雪の降り積る夜です

私は夢をみたのであらうか

北國の冬の夜を――

眠られぬ創痕は

病棟を突きぬけて

いたいたしく吹き荒れてゐた

それは徒らな郷愁を綴るのではなく

――ただ一本の蠟燭の灯

櫓の駈ける鈴の音は

りんりんとあいつのたましいに響いてゐたのだ

今ははや幾多の人間性と云はず

神々をたより

神々のふところの中に

さんぜんと泣して

ただ一本の蠟燭の灯を育て

櫓に乗つて荒野を駈けるあいつ――

あいつは生きてゐる！

しんしんと

雪の降り積るしづかな夜

けれども

ああとしても私はあいつのために祈るのか

六 瓣 信

妹に代りて

るん、るん、るん、るん、

るん、るん、るん、るん

松の梢に、庭石に、雪、雪、

日はたまり、白々と反射すよ。

嬰兒のあかき頬に

新しき母の息吹きはかゝる。

「來年の正月になれば歸れるよ」

空には鶯のこゑがする。

るん、るん、るん、るん、

るん、るん、るん、るん

額によく觸れた百日紅の花もなく

挽 地 英 夫

枯枝に變りなき花々のあはれに

上溶の土の光り鋭く南天の紅ありて

愛しき情、靜にあふるるゑくぼよ、

時よ風うけて百花の亂れか六瓣の

庭にしきつめ處々に木々のかげゆれぬ

るん、るん、るん、るん

るん、るん、るん、るん

故郷の父と母と兄妹とに別れ

新しき生活の限りなき情熱に

南洋〇〇島に在す君に

「もう雪も降り出してあと七日で正月です」

夜來れば乳の張れ、嬰兒の泣きこゑ
母なる試練の日の務めまた樂しきか

入江の雅歌

塩谷安郎

鐘の音が押し重ねられて

雨が降つてゐる

夕ぐれが冷たく煙る

梢が濡れてゐる　はい色に吹く静かな風

火のはぜる音を聞きながら想ふこと――

船のきしめく音が聞えて來る

いつもなら藻が匂ひ金色にかゞやく入江

雨がしきりと叩き　手もさしのべられない

骨のやうに白い格子をとらへて

ちろ／＼と燃える釣洋燈を背後に感じ

枯れた花束を靜かに落した

鈍い骨のくすれる音が足もとで響いた

残酷な嘲笑が私から次第に遠ざかつていつた。

馮かれた夜の歌

絃は悲しく夜をすゝりつゞけてゐた

雪は降り

雪は降り積んで

鐵格子を越えて來るひとひらは

私の膝にあざやかに舞ひ落ちた

蠟燭のゆらぐまにそれは夢のやうに消え

指先は花のやうにあをく燃え上り

夜の蔭翳を滑らかに消してゆく

天使のやうに羽根のあるあなたは

何のこたえもなく秘かに訪れてゐた

或る晴れた春の日の午後

岩谷健司

フューテユリエの梢では

様々なビルディングの廢墟から

灰色の突レンズと、ピツケルの先が徒渉する

心臓の潰かゝつた眞晝

古風な柱時計は八つの角を持ち

沖のヨットと停滯する赤煉瓦の染しほに

共和的な響を馳せ

湯けたゼンマイのカケラが

白鳩の肛門から排泄された

タンクと起重機とのロマンスを描く

犬のやうに凝視める私の前で

限らない生命の歌を咽で歌ひつづけ

すが／＼しい咯血の跡を置いて消えてしまつた。

それは現實的に

太陽を脅かすのは

依然、アスファルトを走る狼どもの憂であつた

追　　想

秋の日がプリズムを縫ひ

靄と發する

彼方

透明な山々を辿る

小男たち

音もなく棕櫚の葉は揺れ
可食的睡眠を咬る
午後

無用の明
空間は静寂を支配した。

早春の歌

木下夕爾

1

わづかなメランコリイを
僕はギターの穴のなかに押込んだ
パラシュートのやうにひらいた
空の下で
僕はマンドリンに似た坂道をのぼつてゆく
僕の靴は消えのこりの雪を踏む
自分の悔恨ほどの雪を

2

春はもう遠く

3

世界のすみずみまであるきまわつて
来る日も来る日もいい天気だ
桑島で頬白が音譜を書く
その尻つぼの先で 早春の音譜を
猫柳は白く抒情詩娘の柔毛のやうに光る
僕の上を
雲の影が大股にとほりすぎる
とある日の僕らの願のやうに
ああ陽に向いて立てる樹木たち

僕はそれをくぐつてゆく
春の門をくぐるやうに
そして丈の高い草を分けながら
草をさがすやうに
僕はさがす
もう一人の自分を
4
硫酸銅いろの湖には

美 訴

小林正純

ぐる ぐる ぐる 廻る瓢蟲の翳から
乳臭いわたしが 生れきて
緑葉素を育ててる 羽布團と
眞白い夢を求める 雛鳥達へ
ともに紫苑のガラスをば

小鳥の死骸や
破かれた楽譜が泛んでゐる
誰かの 鬱積した冬の弾丸が
君らを打貫いたのだらう
あ 啼きながら小鳥が来て水を浴びる
水をあびる
いくつも小さい虹をつみかさねて
破らねばならない日がやつて来た
粉雪である そなたは
ピカピカ光る 双眼鏡で
太陽の光波を背に 焔煙の空を眺め
白紙を引裂き

わたしがわたしの仕事を織り出すことに
鈴蘭の啼を そなたは注ぎます？

爽かにカタカナの合唱が鳴る

夥しい制服の耳は鳴つた

わたしは 日記を炎いた

わたしは インキを投げた

わたしは ペンを折つた

そして白く燃える液を酒杯に満す

栗色の病氣

a mademoiselle K.

其の日

私は露台上に眠つて

眠りながら壘の鳴る音を聞てゐる

止つた置時圭を双手に持つて

貴女の投げるボタンチックな波紋に

私はメロンの皮を浮かす

貴女の書信は

姿鏡の淡い霧を爪先で拂ひ落す

楕圓形の友情で

空腹の私にとつて栗色の病氣である

扇面張合屏風

梶 浦 正 之

情 熱

△無邪氣ハ楯ノ花デスワVといふので△ソウダ無邪氣
ハカノ矛デモアルVとうつかり相槌をうつて踊りはじめ
た二人であるが、それは猛獸の目の中だつた……くるく
る獨樂となり、きりきり錐となつて、跳躍の果 一点の
燠となつた。

母の面輪

手毬のやうに松葉が雪の輪を受けてゐる下で、藁束の
埃を温めてゐた薄い日輪が逃げのびかけると汚い童子ら
は碧い飴ん棒の輪を噛みくだきながら母を呼びはじめた
ひとりひとりの母の面輪を

訣 別

花が散る 花が散る 昔ながらの花が散る

——宿がなければ野に臥やう……

蓮月尼さんと道行となつた夢の中で

だが無言で別れた蝸牛は何處へ行くのだらう

硬い自らの殻を守りながら

月影が 月影が 昔ながらの月影が

味覺の妹

たとへば深山の古刹に齋をとれば あなたは土筆の吸
物に黄ろい湯葉の印籠を拾つたであらう そして高い苔
むしたチヨコレイト・クエイクの石段を敷へながら降り
麓の眞青な楓の日覆の下で裸形の飴菓子となつて憩ふ頃
中腹で老鶯は鳴いた やがて迫る五月雨の酸物に疲れた
心を喚ぶのであらうか

記憶の妹よ 笑へ！ 白い鍵盤の齒並から 幼い日頃
二人の好んだ蒸し立ての外郎餅を想ひ出すまで……

軟 体 動 物

小 池 亮 夫

團子にまるめられ 投げすてられると
びよんと もんどりうつて見せるよ
石鹼をつけて もみくちやにし
天びでほしあげ アイロンで焼きのばす
そんなことをする人を 私は憎む
うでをつかみ あしをとり
仰向きに押さへつけて その
からだ中を見まはす
そんなことをする人は 私は嫌ひだ
しかし穢れをさるか いのちを失ふかだ
どろどろのクロール・カルキーに漬けよ
まつかになつたアイロンで焼け
人肌の吐く 慾情に浸たせ
いや 私は暮方の街を行き
濡れはてて脊をまるめ ポケットの裡で

私の愛しさをまどろんでゐる
ハンカチのありかを づぼんの上から
そつと押さへ 撫でるのである

ぶごういろのうた

長 谷 川 霧 子

雲がサルビヤのやうに含羞んで 沼にかくれてしふまと ふと絶えて
しまつたかなかなの唄 かなかなの唄のあとを追つてゐるといつのま
にやら讚美歌になつて 唇にかへつてゐる 沼べりには誰れもゐない
じつとしてゐるとなにかしら婉しいものが目かくししてしまふ 歸ら
う 今日もしろじろと昏れてしまつた それでもなにかしら思ひは雲
に往來してた 樂譜のやうに 季節のやうにかへらないだらう 青い
め、に、ゆ、う、の、や、う、な――
突然！ よどみの庭で鈴が鳴つてゐる シロホンよりも重く せわし
くやつてきた 嶮しく足もとをみつめる想ひだつた が それでゐて
ぼんやり歩いてた うまごやしの路を……ジークフリードの訓練で大き
くなつた子供達よその掌はどんなだらう……でもやつぱし ひとり ひ
とりのぼたんほゝるには鳩のやうな白い花が咲いてるだらう……などを

そんな白い想ひだつた！。ざわめきが　ぶどういろのかたまりみたい
なよぞらにしほむと急にあたりは魚精泥に　よどんでしまつた　わた
しのふしあはせのやうに

—九月三日—

少女と詩人とピアノ

高岡眞爾

バンガロオの窓は終日海に向つて開かれる
少女のやうに羞んで
海は永遠に解けないシユミーズである
詩人は人青い切手の様にわびしいVなどと
だから窓の中で歌つてゐる

窓のなかにも海がある

少女ヨ　貴女ノナカニハ海ガ填ツテキルノカシラ

少女ヨ　ピアノノナカニモ海ガ填ツテキルノカシラ?

潮騒の様にひびくピアノに埋まつて

少女はさつきからブラジエラを氣にしてゐる
詩人はそして少女の巧みなタツチを理解した

笑ひ崩れるえくぼ、をかくさうと
海は肩をくねらせる
鷗のハンカチーフたちよ
楽譜の様にピアノにとまれ。　ピアノにとまれ。

孔

伊野亨二

肉眼では見えないほどの小さい孔が
私の身体からだのどこかの部分に開あいてゐるのであらう
年を重ねるにつれて私の心は
ゴム毬のやうに空氣がぬけて行く
誰か孔を塞いでくれる人は居ないか
蜻蛉の醜惡な幼虫は太陽をもとめて
ひたすらに水草の莖を攀よちるといふ
私の収縮した心よ
はやく脱殻して蜻蛉の透明な翼となれよ

樹木

青い空へ
赤い建築へ
樹木は美しい大きな調和を示した

彼は彼の枝葉を
上の方に保つた
俗物に攪亂みだされないために

生理 B

ヘルニア蛇が頬杖ついて
紫煙くねらせるさき
星
から腰かはす拍子
骨と肉の隙を墜ちてゆく金属性ボンボン

俗風 S

少女は夜をまたぐ
傷はバラに咲く
傷はキリギリス死ぬ高原の太陽につながつてゐる

長谷雄京二

キヤバレーの哀夢

金椽がロイドにとりかへられても
あなたの眸は琥珀の夢を忘れない

甘艶なメロデーはニコチンにやけた八ツ手の葉にか
らみついて流れた

熱いコーヒーがほのかに五体を暖める時
銀色の圓盤は圓滑な廻轉をつゞける

紳士よ 口髭の紳士よ 黒いソフトをとり給へ
そしてグラスをあげよう、冷たい日を送らう

炙出しの辻占は
藍色の空に焼穴をつくつてしまつた

小山恒兒

夜の翼

松村一美

透明な愛情が過ぎ
白いにほひが胸にしみると
僕の影は二つになる
きみのこえがする
あなたのこえがする
ははのこえもする
それは子供のやうなこえだ
こえにうすれて眠つて行くと
光りも忘れるやうに消えてしまふ
夜が重なる
それは挨拶を忘れた不恰好さを見せて
雲の衣裳に近づいた
自分の生命に階調を忘れてゐると
それとなく 忍びよる
翼のにほひがあつた

風の様

堀口太平

風の様忍び入り
風様に抜けて出で
風よりも尙ほ跡を止めず
肩を昂げて去く僕が
人々の目から消える時
僕も僕の目から消える。
人一倍激しく味ひ、
人一倍早く立直り、
昨日とも今日とも日附は無い
霧の様なメモに
書いて忘れる。

秋風裡

立木冬雄

秋深む竹林の日溜り
戦争は既に昔であつた

撃ち抜かれた厚い壁
白い弾痕

喪服の鴉が啄む香水びん
ズプリングビクチュア

翳雲
静謐の眞晝である

生き残つたレグホンの関の聲
軍靴の跡に咲いたコスモスの花

あでやかな秋蝶の紋
逞しい蟻螂の斧

あゝ 巨大な重量は凡てを抹殺して驀進したが

又しても軋る糸車の音

秋深を竹林の日溜り
戦争は既に昔であつた

光り合ふいのち

國廣勝太郎

あなたのおこゝろが私の胸を搔き亂します
一体私は何を信じたら好いのでせうか――

(女性の苦惱) 攝理への哀しい反旗の閃き
突如――現れた重爆・青滋色の孤空を截つて

金屬の觸れ合ふ音のする 天使の花園に
温室を躍り出た胡蝶が花粉を撒布してゆく

眞白な敷布！ (水昌の瞳を持った童女)
羽蒲團にくるま、つて崩える 白日夢！

煙らしてゐた葉卷の紫煙から——五彩の虹
(ほのぼのと) あゝ やつと甦つた想出!

山を馳け 海を渡り 空をめぐつて
嵐の様に——まつしぐらに戻つて来た愛情!

凍え沈んでゐた人魚の鱗が 銀と映え
しんじつ すべてのもものに光り合ふいのち。

或る風景

西山五百枝

音、聲、氣動の衝撃の埒場の中に、立切るをとめ等の三百六十五日である。

外來患者受付開始前總てのものを滅菌し盡して待機する一瞬の朝寂である。

バルブを開けば、器に満ちた蒸氣が一吐息院庭の旭に白々と疾く消えゆき

何處からともなく潑々と響き来るをとめ等の聲々
聲の時雨となつて今日も白々と綻びゆく一瞬の静間なのである。

江の島を持ちて

後藤敏夫

海は焦つて頭から飛び込み
せくせくせくせく
私の足許まで駆足する
夕陽に照らされたアスファルト
やわらかく陽にとけて
ぶくぶく
私はこころよかつた

ふと振り返ると足跡に
花恥しい終り日が
うつすら頬を染めてゐた
淼望千里はあふれさうに

——展けた海原は何もない

貝殻一つと一杯の砂
持つて歸つた思ひ出が
いまでもコップの中で喝してゐる
そろつと振るとちかりと光る
貝殻耳が鳴つてゐるやうだ

詩 篇

天の夕顔に寄す

小 田 邦 雄

わたくしの精神は恐しく強情になつて参りました。
荒涼とした雪山の中で天の試練にうちかとうとしま

した。

わたくしは一徹になり

愛と美への止みがたい追求にむしろ生を献じたがい
ゝとおもひました。

あゝ、愛とは生とはなんでありませう。

大孤獨界にはいつたのです。

雪と嵐のさなかです。

よしこのまゝ生が終焉しましても

夕顔が地から没したと致しましても

けれども――。

愛はこのまゝ永遠にとどまることのでござるませう。

港

小 林 節 子

こゝは 明るい色彩から遠ざかつた 強い匂ひの
住むまちで

少年の鼻唄にオイルのきしみが踊る朝

國籍を知らない船の船室キャビンに白い手の女おんなは赤い上衣

をつくらふと言ふ

とんだお話にしつぽを跳ねた洋大グレイハウンよりはやく

エーホイ エーホイ

荷役棧橋に群れたいゝ聲は

明あき後ご日ひの方かたを向むいてゐるんだと パイプを衝つへた

男おとこが教おしへてくれた

タバコの煙りはどちらへ流れて行くだらう
ソーダ色の眼をした水兵は 血の匂ひがすると言
つて 歐洲の方ばかり眺める
黒い蝶々の死んでゐるピアノに錠をかけることを
忘れたといつて

ダニエル・グリユウのやうな唇をして見せた少女は
タラップを降りた老婦がある港のひるは
アルミニウムミニウムの音がすると言つて 貧血を起し

た

私は口笛に乗せる色が見あたらず
間拔けた歌を囓つてばかり

空に結ぶリボン

川 口 敏 勇

詩をよむ場合、それを書いた詩人の方が却つて興味深い。時と詩は可なり面白いがその詩人にあふとすつかり幻滅を感じる場合とがある。詩人の觸手に捉へられたポエジイは様々な匂ひと色彩と音響とをたたえてゐるが、詩だけを讀んで興味をもつ年齢から、詩より、その詩人が詩の實體に於てエキスペリメントしようとする精神の構へに興味が行して行く年齢があるものだ。詩人のこの構へをいふものは、小説家の精神の格闘に共に極めて興味のあるもので、この構へを捉へるとその詩人の今後の作品といふものはこれをどう構へて進んでくるかといふ点に興味を湧いて、發表された作品のポアンから發表されるであらう未知のポアンまでの線が實に陰影にとんだ立体的な思索の匂をもたらしものである。幾何の二点間のポアンは確立した一つの眞理であるが、詩人の二点間のポアンは地球とヴェガアを結ぶかも知れない興味である。この二つのポアンに依つて言語の純粹性とか傳達性、或は詩に於ける意味の問題などが暗示せられる様に思ふ。現代詩の出發が詩に意味を無くしたといふのは、散文的な論理的意味であつて、ダヴィッド・ダイチなども指摘してゐるやうに一つの意味行爲に續いて、當然期待せらるべき次の意味行爲であつた。期待といふ精神の最大の秘密は期待する者が未知な姿で顯示されることであり、それが希望を以て希まれるといふことであつた。しかし現代詩に於ては單に希望といふ美しい精神方面だけでなく恐怖も、不安も、憎悪も、絶望も包攝されよう。詩人が一つの意味關聯から次の意味關聯へ一つの希望の状態だけの技法をとればそこには美しい小夜曲が出来上るかも知れない。而し希待といふ精神的な緊張感を感じて一面の一定したつながりを持つと、その効果に於て著しく減殺されたものを表現することにならう。讀賣新聞の電光ニュースが朝日新聞より美しくないのは、朝日新聞社には數奇屋橋があり、電車があり、雑沓があつて邊りが物凄く殺伐たる

近代風景の分散性を呈してゐるのに、前者はむしろ河水に絢爛した赤いネオンの靜的な一面性しか反映しないからである。美といふものが一つのモチーフによつて完成されたのは時代が單純をもつて事たりた過去だからであつて、聲の出ないフィルムがどんなに奇異な感じがするかは既に映畫が實證してゐる。美といふ要素の中に醜を入れたのが近代繪畫の一つの進展であつたやうに、言語の純粹といふことも、今までに習慣的に考へられてゐた言語に於ける思想の傳達性といふ、いかめしい鎧を脱いでプリミチヴな暗示性をもつ言語だけの世界に還元して、その言語だけの透明な美しい機能に詩人のボエジイを通じて認識しなほさうとするのである。言語の純粹といふことが、シャボン玉のやうにくり／＼と廻轉し、赤や青や紫の地圖のある果敢ない瞬間的のものか、虹のやうに遠く離れた美しい現實から乖離しきつた世界であるかは問題でない。詩に於ける言語の純粹とはその詩のみが完成し得る最も豊饒な暗示を抽象した最も具體的な詩人の呼吸であり、最大限に飽和された意味充實を最も簡勁な言葉で發光させたものであらう。小説家といふ人間が凡ゆる人生の雜事を見たり、考へたがるに對して、詩人といふ人間は何かに馮かれた様な状態で自己の精神の憧憬と外界との境界を彷徨して何かしら不可解なものを模索してゐるのである。ポオドレエルが黄昏を好んでさまよつたといふのも、晝と夜と更に黄昏といふ、薄明の新しい世界までも同時に享受出来る不思議に切ないこの豊かな三つの世界を複雑な都會の内部で感じようとした詩人の詩的彷徨であり、外界と自己と憧憬の中に見出される哀切なる人生享樂であり、同時に憎らしいまで豊饒な感性の自己感溺である。武藏野の白い霧につつまれた黄昏を彷徨ふとも淋しい絶望とも呻きとも知れない感情が凄美な黄昏の自然に調和して、或時は美しく、或時は切なく様々の交叉した感情が生きたといふふしぎな都會的感情に纏まつてくゝるのを感じる。ポオドレエルのデエモンは詩人に永久に残された思想争闘へのデヘモンであらう。「詩を神秘的にしない以前に、詩には充ち溢れる秘密がある」とミルドルトン・マアライ氏はいつてゐる。かうした美しい言葉がそのまま受け入れると誤算が生れる。これは觀念的にはよく解つてゐるのであるが日本では生活がないから兎角言葉だけがとられ易い。

神秘といふ言葉も科學的態度の洗禮をうけないと神憑りの魔法のやうな主觀的なものになつてしまふ。信仰とか、獨斷とかは有えやうが、西洋文化のやうにたえずそこから進展し、實證づけて行かうとする科學的探及に缺けてゐて、精神的な推進力がないのである。美しいものをもらふと、後生大事に持つて歸つて白髪のおぢいさんになつたといふ浦島太郎の玉手箱は癪な程適切に民族精神を表現した傳説である。一應興味は持つてみる、破壊までしてみる。しかし、それ以上は何等もしないといふのが可成り根強く僕達の生活の近くにある。純粹詩の問題、シュウル・リアリズムの問題などはサンボリズム以後の實に大きな詩的革命であつた。現代に於てもかうした言語の實驗は相當行はれてゐるやうであるが僕はコクトオがボエジイ一冊で追及した詩的エキスペリメントも日本の詩壇では出来てゐないかと思ふ。翻譯で讀んで日本語譯的なコクトオはたくみに行はれたがああしたエキスペリメントものは出来てゐない。むしろさうした精神がよめる頃日本詩人は詩人たることを放棄してゐるのでないかと考へるのである。従つてエキスペリメントせられる詩の言語といふものはエキスペリメントしてオリヂナルな世界を拓く詩人ではなくただレベルにまで達しようとする詩人によつてエキスペリメントせられつつあるのが感ぜられる。殊に詩などが他國語から翻譯せられなければならないといふのは自分がさうした秘密を冒しながら、何かいたまじいぎこちなさを感じるのである。白い空間と活字と文字の形象的な位置まで剋勵に熟慮せられた自分の一篇の詩を考へて見給へ。さうした淋しさがはつきり解ると思ふ。傳統はあるが、激しいパツシヨネイトな希求が詩精神の中に見出されないといふ氣持がこの頃になつて僕には沁々と感じられる。勿論エキスペリメンタルなものはある。がそれはア・ラ・モオドなもので何かコミックな道化たものを感じさす程度で詩人としてのシンセリテイを發見するためには可なりな骨を折らねばならないか或はピエロが眞鍮であればある程コミックなやうに靜かに見ればしぐさのみが變に感動的で空虚なものが多分に産出されてゐるのである。詩といふふしぎな生物は、こちらが一生涯懸命にあると彼は恐れて近寄らないし、こちらが知らぬ顔をしてほつておくと案外近くに來てゐる場合がある。「詩人の主要な目

的は経験の精確な細部を傳へることなくそのトオンとリズムをつたへる事だ。詩は喜びを與へ我々を魅惑する。一つの詩に於て純粹に傳達的な効果を無視した場合に於ても、尙、詩に暗示せられる何か他の不思議な魅了的なものがある。」とC・D・ルイスはいつてゐる。小説家が散文を以て自己の思念を追求するやうに詩人は「何か他の不思議なもの」の實體を求めて永久に詩の圓周を彷徨ふものであるかも知れぬ。小説家には書かうとする論理的な作家的世界觀が明瞭につかまれてゐるが、詩人には到達しようとするものが内部で燃焼してゐるとしてもそれを明瞭に把握する事が出来ない。把握した瞬間詩は散文にメタモルフォズするからである。しかし表現して見ると大体自分が、かくありたいと希つてゐた姿に髣髴してゐることに氣づく。しかし、詩の實體をいひ切つた瞬間、詩は普通の散文に低下してゐるかも知れないふしぎな觸媒のあることである。

勿論表現しようとする詩人の志向は汲める。が、表現されたものは、志向性は諒解されるとしても、詩としては極めて稀薄なものになる危険がある。この点モダニストの詩人は過去のサンボリストが求めたやうに社會への消極性の中で象牙の塔を建てるべきではなく、むしろ社會の有機的な一員として積極的な世界觀に立つてより、正しい社會の實現へ能動的に働いて多分に取入れてゐる様であり、言語の視覺的な關聯を一つの意味のつながりから、次の關聯に於て最もその意味と違つた非常識な結合に依つて新しい結合を試みようとし、或は、一つの意味關聯を次の意味關聯を破壊してゆく飛躍の面白さに依つて、詩を試みようとした。新しい詩の言語といふものが「ミミズと物資總動員」との意味の距たりのやうな言語で置換されたのである。僕はさうした時イメジで詩を讀むから樂で仲々面白い。しかしそれは、日本のニュウズよりパラマウントのニュースの方が珍らしいといふカメラと風景の問題である。スクリーンも鮮明で、でてくる風物もセンセイショナルで、大規模である。美しかつたと思ふ。樂しかつたと思ふ。しかし、さうしたことなら文字といふ不便なものをもたどらなくてもニュース映畫の方が余程美しく愉しいことになる繪畫でデコレイティヴな意味を極度に發揮して新鮮

な視覺効果をねらふやうになつたけれど、マチスの繪が何故魅力があるかといふのとはなはだ似寄つた問題を提議することになる。裝飾的な繪畫もいいが、一つのリングにしてもセザンヌの實物を見たあの畫格の持味の津々として掬すべきものがあるやうに、僕は一篇のエリユアルの詩に限りない、ポエジイの愉しさを感じるのである。言語を情緒的に追及するとリリズムになり易いが之はヴァレリイも言つてゐるやうに「リリズムは感歎詞の進展である」が故に詩的効果といふ点から詩人自身の反省が必要になる。恰も美しい戀人にも時には涙が愛を深めるとともに、あまりの涙が嫌氣をさそふやうに。かう考へると詩も又一つの假構の世界ではないかといふ点である。詩人が一番咏歎し悲しみきつた時にも美しい詩は生れる。むしろ、さうした場合の方が普通より効果としては上乘である。しかし、そこには詩の悲しみはあつても、詩の神秘はあり得ない。感情の激しい世界は咏歎であつて、詩ではない。假構の世界は咏歎はない代りにはげしく迫る感情の何物かに缺いてゐる点はある。このマジックを結合するために多くの詩人が様々な方法でこの神秘に迫らうとした。嘘言も第三者がきけば眞實になる。ここにふしぎな現實の機構がある。詩人の秘密がある。この機構におちて美しい嘘言を眞實のやうに錯覺する。流行の詩は生れる。それはガラスのやうに或は女の手袋の様に年々變つて行く。新劇では髪を長くして憂鬱な顔にして詩人に仕立てる現象である。現代の現象である。マイケル・ロバッツが先年詩集を出した時にはクワイテリオンでトムランにひどくやられた。しかし、彼は詩の言語をエキスペリメントな方面から思想であつて同時、思想でない、ふしぎな一つの實體として把握しようとしてゐるやうに思へる。

はげしい現實の世界の中で、進展する時代の波に濡れながら、じつと現實の嵐の中ではげしい思念の眼をひからせながら、過去の言語をふるひ落して、露はな生き生きとした言語としての純粹な機能を現實の中から、もつと現代人の急迫した人間のあがきの何物かを、冷たい抽象の言葉で、しかも具体的に僕達に迫るものを求むべきではないか。詩は繊細な美しいものであつた。弱いものであつた。しかし、今までのすぐれた詩は單にさうしたものでなかつた。時の哲學的な問題

が人間の愛に還つたやうに、感覺的な技術方面への關心からもつと人間の本然的なものが詩といふ適切な、短かい言葉で發光させられるべき時である。

文學以前の諸問題

(續アド・リビタム)

塩野保男

技術

職業的外交官は、今日では大した役割を爲すものではなくなつた。そして、それは、彼等が今日までの過去に於て、單に外交の技術家に過ぎなかつたことを物語つてゐる。このことは、目的を持たない技術、別の言葉で言へば、目的が技術そのものにある技術、そうした技術が技術として練磨されることの結果が、どんなものであるかを、よく吾々に説明して呉れてゐる。

生と死

出産の時と死亡の時とは、その雰圍氣が全く相似てゐる。似て居るのは當然で、一方は彼方への出發であり、一方は此方への出發である。人々は、死後についてはほとんど何も知つてゐないくせに、出産を喜び死のみ悲しみ恐れるのは、全くおかしいことではないか。

信號

血は水よりも濃しと言ひ、兄弟は他人の始まりとも言ふ。信號が多くて困ります。赤と青とが一緒に出たんでは、氣の小さいものは向ふ側には渡れません。

表情

涙で洗はれ、怒りで燃やしつくされ、笑ひで忘れられ、愚痴で塗り潰される——さうした悲しみや憤怒や喜びや失望は數限りなく吾々の身邊に生起する。然も、そうしたものの一つ一つに身を委ねる時、吾々の一生は、一冊の表情集を手にして居るやうなものになる。動かない空は、常に無限の感情を湛へて居る。

喜怒哀樂

人は泣き、笑ひ、怒り、喜ぶ。然し、眞實それは誰の爲に爲されてゐるのであらうか。若し、専ら自分自身のためにのみなされてゐるのだとしたら、それは余り大した役目を果たして居るものではない。

故人

葬儀が執行される時、そこに列席する人の大部分は、故人に對してよりも、より多く遺族に對して、或は更にそれ等以外のものに對して弔意を表現して居るのである葬儀が済んで了へば、もはや故人の墓地に頼づく人は極く稀なものとなる。

個性 A

個性の強さは、時として、その人の生存を危険に瀕せしめる可能性を多分に持つ。反對に、個性の弱さは、それらの人々の屬する社會や團體やを、しばしば危険に瀕せしめるものである。

個性 B

職業によつてその人のタイプがきまり、タイプによつてその人の職業が判る。このことは、一般に承認せられてよい事實である。然し、同時にこのことによつて、人間の個性といふものが、如何に脆弱なものであるかを承認せねばならない破目に陥る。職業の種類の大さは、常に尨大なる種類の人間のタイプを作り出す。然し、それは、尨大なる種類の個性を意味しては居ないのだ。

原理

適者生存・弱肉強食——この原理は、しばしば不適者生存・強肉弱食の事實をもつて裏書されねばならない皮肉な運命に遭遇して居る。して見ると、この原理は、否、總てこれらの原理は一体何を言はうとしてゐるのであらうか。

人間の物の考へ方

人間の物の考へ方は、組織的、構造的、論理的、推理的等々と言はれるにしても、その考へられた結果は、余りにもそれらのものを無視しすぎてゐる事が多い。

型式

中・青年にとつて手段として選ばれた型式は、老年にとつてはそのまま目的として固定されてしまふ。

論理と矛盾

論理そのものが、その成立の根源に於て、一方的な真理の上に築かれるものである以上、論理上の正確さ等は問題外にするとしても、吾々は尙且、その中に何等かの矛盾を含まない物の言ひ方をした事があるであらうか。

道具と老人と

使ひ古された道具には、やがて不用品として捨てられねばならない時期が来る。しかし、或る種類の道具だけは、それが道具として役立つなくなつても、その歴史的な意味のためにのみ珍重されるものがある。従つて、その歴史を知らない人にとつては、それは全く取るに足らないものでしかない。

職業と人と

その人が糊口の道として選んだ職業を土台にして、そこから凡そ其の人の眞價を計り知らうとすることは、全く無謀の一語に盡きる。

武器

大人は相手を知るのに、その理性や知性の援助を受けなくてはならない。小供はそんな面倒なものには必要としない。彼等はその直観を以つて、直ちに相手を全的に見抜いて了ふ。無智なる者には無智なる者の武器がある。その武器たるや、かつて大人の何人もが、皆一度は手にしたことのある武器なのであるが、それについての操作法は、大人の頭の何處を探しても見當らない。

正札で買へないもの

理解、或はわかる、と言ふことは、一体どんな状態を示す言葉なのであらうか。是等の言葉が、實際には、余りにも正札以下の價値しか持たない事實を數多く知つてゐる者にとつては、到底、それを正札で買ひ取る元氣は出て來ない。その言葉が、その言葉の持つ意味を充分果してゐると思はれる時でさへ、それは、その對象に比較的近似した状態を示して居るに過ぎない。しかも吾々は、今日ですらこの程度のもので我慢しなくてはならないものを、此の言葉以外に何んと數多く持つてゐることであらうか。

偽悪

偽善の存在は、常識のやうに普遍的なものである。これに反して、偽悪は稀にしかない。偽悪を武器とする悪人はあつても、偽悪で武装した悪人はまづ無いと言つてもよい。假りにあつたにしろ、それに依つて逆の効果を狙ふ程彼等は偽善的である。即ち、悪人的である。だが、私は稀に偽悪的な善人を發見する。然も、この善人たるや、決して所謂お人よしの類ではないのである。

焔

如何に高温が保たれて居ようと、焔のない燧燼は冷めたく味氣ない。少年時代のその様に、胸をゆさぶる感激や驚

異の焰は、大人の世界の爐端には燃えて居ない。

過失

如何に自己辯護しようとも、私も他の親達と同じやうに、全く一匹の動物として行動することによつて、瞬間一個の生命体を創り出してつた。然も。この地上で、私の最も深い愛の對象となるべき生命体を――。

美しい芝生

他の人の座つてゐる芝生は美しく見えるものだ、と諺は言つてゐる。ところが、實際には、自分の座つてゐる芝生のみが、一番美しく見えるのだから困つたものである。

宇宙の一秒

十年前の小鳥は、もうこの籠の中には居りません。今、雛の口に餌を移してゐるのは、三年前に生れた親です。そして彼の親ももうここには居りません。この家の主人も變りました。そして、今日の宇宙の短い一秒が暮れかけてゐるのです。

花嫁衣裳

老人にとつて、彼の名譽や地位の實質は、現在の彼に對しては、凡そ縁遠い存在である。それは、老婆が示す彼女の花嫁衣裳のやうなものである。

信念

青年の生活に比べて老人の生活の方がより信念的である、とは大きな誤認である。老人は實に幾多の信念を持つてゐるが一向信念に生きてゐる様子がない。彼等の生活が信念的に見へるのは、實は、その老年的生活形態の不活潑さ、停滞乃至沈澱性に基く一般的な現象に過ぎない。これに引きかへ、青年にあつては、信念は常にそれに生きることに於てのみ是を持つ價值があるのである。

老人の信念

多くの場合、老人の持つ信念と言ふものは、その確固不動さの本質に於て、彼の硬化した動脈と似通つたものである。

徳

有閑は罪惡である。然り、尠くとも、暇なく働かねば生きて行けない人間のある間は罪惡である。だが、總ての徳は、余りにも有閑的な所産物ではなかつたらうか。

飲食

結局はそのためにのみ生きてゐるかのやうに、よろこびにつけ、かなしみにつけ、人間程よく喰ひよく飲むものは、亦と他にはあるまい。

審判

特殊な事實をもつて、恰もそれが一般的な技術であり、或は一般的な事實であらねばならぬかの如くに主張し、かくすることに依つて、人々の注意と尊敬とをかち獲て居る人が果して居ないと云へるのであらうか。特殊を豫想しない一般が、事實上成立不可能なものである限り、人々の多くは、一應かうした人の説を正當なものとして取り入れる。謂ふ所の新學説や新原理の發見がかうした類のものでないことを希望はするものの、不幸にして吾々は現代の審判者たり得ないのが残念である。

捕虜

數學者は、勿論數學に明るく、それを正確に運用する方法を知つて居り、且亦その正確さを信じ切つてゐる。だが、失禮乍ら彼等は、數學が正確であり得る限界については、ほとんど白痴的である。とかく、その道の專問家と言はれる人は皆何れもこの傾向の捕虜となつてゐる。

辭書は、百萬人のために作られたものであるにせよ、常に、それを使用する百萬人の一人一人に於てしか役立たない。そこには百萬人の個々の孤立した理解はあつても、全体に通ずる理解はない。(一九四〇・二)

神話の詩人

小 田 邦 雄

宇宙的な理想を極言までに追ひやりながら彼は二十世紀の時空の中に逞しく屹立してゐた。宇宙美の中に自己を生育させながら、それを痛烈になしてしまつた。彼の如きは精神の豪華な祝祭者と云つていゝのであらう。彼の理想としたイーハトーヴォの香りは精神と生との完全に融合した美學であつた。現實を超えた現實、精神内部の當爲のなかで可能を成した奇蹟である。宇宙の久遠の今、永遠を生の上に樹立した歡喜と愛を高らかに歌つた。それらは自ら四次元藝術創造への衝動と行動を求めた。近代の懷疑思想と彼は太陽と星との距離の如く潮流をことにした。最近出版せられた「宮澤賢治名作選」を手にして私の心の内部で定見に近い自信を高めたのである。そこには誠に驚くべき、美しい豫言と行爲を遂げてゐた。

豫言とは何であらうか。一般言ふところの新らしさであらうか。無論新らしさである。彼の場合しかも新らしく古い。のみならず今日の潮流の中にその源はない。今日の何れの潮流からも遙に屹立してゐる。彼だけが實に屹立して居るのである。彼は獨個にして例外をなした。これは彼の崇高な觀念と自由と叡智に満ちた愛と美との誕生のことを言ふのだ。巡遊の神人柿本の人麻呂時代即ち萬葉の浪漫的精神の血統を彼の内部に發見して私は喜ぶのである。

おほぎみは神にしませば天雲のいかづちの上にいほりするかも

人麻呂

人麻呂に見るこの高潔は實に現世に理想を高く歌ひ、神の實現を現世に來たらしたその高邁浪漫的な精神である。今日徒らに現實から醜惡を發見して、神性を侮辱するリアリズムの流れとその根底を異にするものである。

宮澤賢治の場合永遠の理想を生きる覺悟に立つた。この廣大無邊な永世の願ひこそ、超時の今、詩は生を歌ひ、生は永遠と瞬間とが最も見事に結合し「春と修羅」四次元創造への高き理想の橋を渡したのである。彼はこの時、個体でありながら全体へ捨身し、宇宙へ神へと高まるのである。彼の詩篇が交響樂的なリズムの音成を養つてゐる源因は實に彼のイーハトーヴォの宇宙自然がいのちの流れであり、いのちの祝祭であつた以所である。

彼の内部の深い教養であつた綜合學も科學も音樂も宗教も彼の場合詩人の絶体時のなかで消化され、四次元への理想の一方便であつた。「春と修羅」を科學と宗教と音樂との合一といふ定評に、いさゝかも反對したく考へるものではないが私は血統とモラルの祝祭として考へてゐるものだ。自然の風物のいのちを把握するとき、彼は生命の流れに音樂と科學的風貌をもつてしたとしても、彼の根底は理想と美のモラルに心燃えたに間違ひない。「人間も自然の一部です」——と言つた彼はモラルの根底にたつたのである。この故に潑刺と歌つた。

海だべがと おら おもたれば

やつぱり光る山だちや

ホウ

髪毛 風吹けば

鹿踊りだぢやい。

詩 「高原」

豪者無双である。

邪無き者の映象である。

「雨ニモマケズ風ニモマケズ」の彼の有名な作品を誦んでみると彼の氣質の廣大なる慈愛を發見して宇宙求道の精神の止みがたい象徴にたゞ敬服するの外はない。彼の精神の中には合理や必然を唱つた痕跡は微塵もなく、精神へ精神へと高く昇つていつた。

(おまへがたべるこのふたわんのゆきに

わたくしはいまころからいのる

どこかこれが兜卒とそつの天の食に變つて

やがてはおまへとみんなとに

聖い資糧をもたらすことを

わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ)

詩 「永訣の朝」の一節

「永訣の朝」「松の針」「無聲慟哭」等には人生の誠實をかけた安らかなお吐息がもれてくる。ひた／＼と寄せてくる高い響きである。「小岩井農場」「青森挽歌」「オホーツク挽歌」等には自然風物がせはしく明滅しながら生命大世界の調

和を響かして妙である。彼に於てはボードレイルやランポーのもつ暗さと相刻との疲れはない。生命を宇宙的悠久に任せたるのみが知る、光榮の生がある。宮澤賢治に於ける精神内容は徹底して創造への止みがたい熱情である。最も古くして新しい地点を清新に強烈無比に生きた。そこに献身と捨身を以て永遠の美と生に吾を發見して、血の傳統を無言のうち

に豫言した。神話のなかに生き、それを歌つた。必然彼は實利をはなれて神話のなかの人間を樹立した。即ち、「われらに要るものは銀河を包む透明な意志巨きな力と熱である……」。

「お、朋だちよいつしよに正しい力を併せ われらすべての田園とわれらのすべての生活を一つの巨きな第四次元の藝術に創りあげようではないか……」これらの言葉で「農民藝術概論」をしるしたのである。理想世界イーハトーヴオ、現世に理想をみた偉大なる詩魂である。「永久の未完成これ完成である」と言ひ、

「理解を了らばわれらかゝる論をも棄つる」

「畢竟こゝに宮治賢治一九二を年のその考があるのみである。」修羅の詩人の理想は、現實に理想を招來させることのみ熱意した。

「牧歌」を引くならば

種山ヶ原の雲の中で刈つた草は

どこさが置いだか忘れだ 雨ふる

種山ヶ原の置きわすれの草のたばは

どこかの尾根でぬれでる ぬれでる

この「牧歌」の雄渾な響に萬葉の、大きなどよめきに似た神話の聲を聴くのである。宮澤賢治といふ二十世紀の古代人は氣圈の雲の中に光彩を放ちながら、不思議な言靈の香りを民族的生命の中に樹立したのである。最後に彼の言葉を引用して原稿を終りたい。

あゝひとおのおのわざをもなせど

つみひとなくわれらにあらん

あまねきちからに地をうるほし

なべてのなやみをとほにも抜かん

まことのねがひにたゝずやれら

(石狩國 白雲莊にて)

「詩の原理と實驗」について

濱 名 興 志 春

すこしく回顧的にはなるけれど、梶浦正之といふ名を活字で拜見したのは、もう随分古いことである。永井荷風氏の「珊瑚集」や有明詩集を學生時代に、僅少のお小使をさいて父母へは内密で讀んだが、そんなときどこかの雑誌(日本詩人?)で氏の詩を瞥見したようにも憶はれる。とにかく、サンボリズムが擡頭し、圓熟の域に達しつつあつた詩の曙のと

きで、何か清新なものを僕たち初心者に植えてくれた。

さうした概念で、このたび上梓された梶浦正之氏の「詩の原理と實驗」を讀みはじめたのではあるが、どうしてどうして、この詩論集は、さういふ概念をふきとばすほど、角度に於てその當時とは格段の相違があるのに先づ驚かざるを得なかつた。在來の生命なき定形詩論や新律格論、定音自由律論あるひは散文詩論の解説ではなく、新しい今日の詩論の整備であり、貴重な實驗であつたからである。しかし觀方に於ては、鳥渡歴史的なエッセイかも知れない。それにしても、近代詩がどういふ足どりをなしたかといふことを知る上に、大いに役立つと思ふ。ながくたゆみなく詩の眞の在り方を探究修得した後、氏により甫めて大系づけられた貴重なモニュメントである。

まで第一篇の「詩の定義」を見るに、そこでは抒情詩の發展経路を明述して「抒情詩は音樂的伴奏と情緒にその表現効果を發達せしめたのである。チルタイオス、サツフォ、アナクレオン等によつて代表される之らの抒情詩人は専ら人生、美、戀愛又は生死への感激、競技の勝利讚美などを主情的スタイルを以て歌つた。抒情詩の原名はリラ琴(Lyra)から轉化してリリコス(Lyricus)即ちリリック(Lyric)となつたので、當時はリラ琴に合せて吟唱された。」といふ個所などは詩歴の良識として知つておく必要があるだらう。また萩原朔太郎氏の論旨は嘗てヴァレリイが人類の敵とまで明言したパスカルの「感情は理智の知らない眞理を知つてゐる」といふ言葉を唯一の武器としてゐる。といつた梶浦氏は、眞正面から萩原氏の「詩の原理」の中樞へ、鋭く食ひこみ、新しいメスを揮つたことは採り擧げていい卓見であつた。しかし、かつて Paul Valéryの詩のごとく不可解な「詩とは智性の祭典である」といつた詩論の一齣は、物それ自体の眞個の姿を誘發するところの、一つの假設された理想的極言を現實することの謂であつて、梶浦氏もそのことを強調してゐるので、ここでは氏がアンチ・インスピレーションの立場にあることは明かである。

第二篇の終りの方で、傳統主義と進歩主義との融合性において、英米詩壇の一權威をなした E. S. Eliot—Selected

「受容器」のなかで「新しい合成体を創るために結合すべき全ての分子が一時に出合ふまで、そこに滞留する多くの感情、辭句、映像を捕へて止めおく一個の受容器」といつたことを引用してあるが、この「受容器」とは、とりもなほさず詩人のスピリットである。かかるスピリットの沿岸には必然的に思想感情がただよつてゐる。「思想は詩句の中に、果實の滋養分のやうに隠されてゐなければならぬ。果實は滋養分ではあるが、美味としか見えない。人は快樂しか感じては居ないが、滋養分を受けてゐるのだ。甘美の快感が見えぬ滋養分を被ひ包んで、運び導くのだ。」といふところ、ヴァレリイならずとも僕らも考へてゐたことを端的に云つたのではあるが、思想をばただ單コ文字の意味だけで解釋しては危険である。これを要約すれば詩全体を包んでゐる所謂、舞台の俳優の諸動作について脚光される光のやうなもので、梶浦氏のいふ聯想作用の出來、不出來、感情素材の整理の如何にかかつてゐることである。氏が「一つの聯想と他の聯想との間に有機的關係が感受されなければならぬ。」といつたのは正しい。たとへ如何にとびはなれたメブジエとオブジエであつても、そこに現實性とか同一性がなければならぬのは自明なことであらう。

梶浦氏の引用してゐるエリオットの論文選集の「タイプライターの噪音と料理の匂ひとは、ともに無關係である。だが詩人の精神にあつては、これらの諸經驗（聯想）が常に新鮮な有機的一體を形成してゐる」のである。「何が歌はれてあるか、ではなく、何が如何に歌はれてあるか。」五十一頁といふことは所詮「内容と形態」の問題である。が、今日までは後者が主要な推進力を持つて、譬へば「ある一つの觀念をば傳達するひは描寫するのではなく、フォルムが記述されることに依つて意味の世界が出て來るのである」春山行夫といつたのも、既に美しい歴史に屬し、もはや果すべき役目は濟んでゐるのである。最近では、前者の傾向が顯著になりつつあることは注意すべきであらう。が、これはあながち傳統への復歸ではなく、新たな詩的方向を示すものである。またこの兩者を秩序づけ、同時的表象を醸し出すことによつて、一つのユニークな世界像を創成しつつある詩人もゐる。これはかつて「純粹詩」に據つた詩人や現在「詩文學研究」の有

力な詩人がエキスベリントトしつつかある事實によつても明かである。いづれを是となすべきか、孰れを非となすべきかは、その時代の動きに俊敏にタッチすることに依つて、相互の因果關係といふか、主從機能といふものを異にする。しかも氏はさらに論を進めて、川路柳虹氏の「新律格の提唱」の形式重偏論に抗して、やゝ抽象的ではあるが、

一、形式はすべてその詩を構成する素材の性質に據るべきこと。

二、詩がその目的を遂行するために當然蒙るべき生理的限度に據るべきこと。

この二つの基準を中心として、理路をきり拓いていつたことは妥當である。

いちばん終りの章で、今日を生きる文化人的教養のために、蒙を啓き、詩作の實際について、新しくかつ適切に現代詩を引用して、手をとるやうに解説してゐる。

全篇を通じて極めて組織的に、詩の近代性、内容と形式、心理的分析、思想と感情、聯想作用、方法論など、最近よく問題になつたものが、秩序づけられ、体系化されてゐて、讀者は數十卷の詩論を讀破したと同じ認識をふかめる事だらう。えてして横幅の廣い詩論にありがちな、詩の入門、詩の作り方程度に墮することなく、また退屈なアカデミックの形骸に陥らなかつた反面、氏の主義傾向とか、新しいムウヴメントが、ある意味でぼやけてゐるのは、ある種の一派をつくる曲つた考へから爲されたのではなく、公平なるべきこの詩書の性質上やむを得なかつたのではないかとおもふ。次の詩書で、筆者の希望である氏の新しい方向を示して下さることを期待し、おはりに、現代詩の實体の把握に努められた勞作を多として、紙面の都合もあり、書き足りないところも尠くはないが、この邊でひとまづペンを擱く。

斷章

森下舜一郎

☆

日本的な黄昏

私の手が白過ぎる

むかし私を辱しめた賣春婦に

現世の眞實を見出した

△失職▽

☆

静かな世界の鳥瞰圖

まっさ、青の海の底だ

爆弾を抱いた飛行機の空襲に

貴婦人の手の白さが輝いてゐた

△世界の色彩▽

☆

カメラは國々の心臓を抉る

鳥瞰圖となる人々の顔色が

黒いん夜に

季節の歩みを追ふ

△世界の色彩▽

☆

落魄の一群の人達

剝つても剝つても剝りきれない

生活の体臭に

擬勢の感情を反芻する

△生活▽

秋日抄

水島秋夫

くちびるにあてると

はなびらは

いつびきのかなしいむしであつた

あきのまあぶるの理念の上に

聲もなき残歌にむせぶ

いつびきのかなしいむしであつた。

いくつもの蜻蛉の翅影が

荒れはてた心頭に

とほい談話をおとすあたり

きのふの花びらをまきながら月がのぼり

きのふの花びらを拾ひながら蟲がなく

今日の如く明日もあるであらう人々の腐肉に

いちにち 憂恨の風は煌き

言葉もない額を翳つて

白雲は何ものかの爲に美しく流れてゐる

むしよ

わたしの古びれた衣裳は

お前の涙でぬれはてしまつた

その重量の下に わたしはわたしを忘れて

終日 お前の泣聲のみ楽しんでゐる

くちびるにあてると

むしはわたしのくちびるを噛んだ

あふれおちる血潮の中で

むしは放埒の生を楽しみ

昨日の如く人々は雲の談話を聴いてゐる。

銅像

岡田武雄

荊の垣から覗くと晴れそうにない穹である

深いプライドを秘めた笑靨のない表情である

白いタオルを肩に 野人の如く眉をあげ

ぼろと かすむ風の中の風をたしかめる

すでに満ちたりた愛情の問題である

いか雨が降て来る

息の根をつめて 大地をたたき

ひとときわはげしく頭布をたたき
滲婉と微笑するゝ文化の悪食Vである
泥飛沫を浴びた雲である
満足と 嘲笑と
雨さんくと 濡れてゐる貌である

青夜頌

ばら苑にランプを忘れたので
肋骨の枝は折れ
青い月光は濁つてしもうた

佗しい明りに この道は遠く
力いつばいの踵に風が吹き
忍冬の蔓は生ものゝ如く

藤房の垂るる頃

—同窓會の日に—

あなたたちは花のペーヂを閉ぢ、爽やかな葉櫻のペー

闇に絡でしもうた

それは柔らかな 乳房の眞上

天使の如く泣ぼく

悪鬼の如く逞ましく

星のひかりを肩にして歩行く

たしか雲の思想であつたが

原始の邑に似た地圖に腹匍ひ

ひとつところを 往き もどり

いまさら 夜は語るまい

その手は眼

その胸は口

空いつばいの息を 吐いてしもうた

藤 浪 里 子

ヂを開く

またも招かれた季節

どのやうな神の啓示が流れ渉るのか

長い睡から水車は目覚めはじめ

かつてこの小流に光る曙の形態を手鼓に喩へたのは誰

だらう

いま無花果の萎た掌は緑にひらく

ゆるやかな歩み 晩れ咲きの蓮華草が靡く

白 い 處 女

☆

ぬれぬれとこむる處女の 白無垢の晴着にもまつは
る縦糸の細やかさを 更に幼なくほぐしてゆくしすて
むの光りと光り 杳い影を投げかけて呼ぶ飛沫の聲を
かいくぐり 今はいらぬの棲を揃へる肌色のおきて
惨み出た汗を脂を生ぬるい抱擁の眞實でいだきしめ
ほのぼのとつたう潜熱をひそやかに睫毛の露にまばた

池 上 ひ さ 子

裳裾にまつはる刺繡の花々は
昔を歌ふ軟かいセーラ服のネクタイを想ふ
今日の午後の風俗畫よ
小さな丘の叢に白臘の肌を沈めた人よ
二人の丸い肩に乗つた歳月の虹を追つて
すぎし日 あなたの愛した藤棚はこんなにも紫の香に
ぬれぬれて……

かせ ふつふつと擴がるしやぼんの泡に嘘を浮かせる
悲しい術を覺へ初めたのは白い肌の 一つの頃からの
くぎりであつたらうか ぢいつと身をひそめてそのく
ぎりにひたくと私をひたしてみる 湯船の中に眼を
開いた瞳孔にしきりに降りかゝるいたい視線は、かつ
て知らないあなたの指の動きとなつて 波紋を渡る綱
に私は靜に縛られてゆくのである

☆

肉のくぼみと盛り上る白い意欲に 透明な血潮のとく
くとくとあふれる音がする

ちいつと指を噛めば すつばい熱れかけたリングの
きめが さわやかな唇の朱さにとけのこり 刻がつい
ばんだとさかにも雄雞の逞しい体臭がむれて息づく

そこに止まつてゐた言葉の輪も ふと圓を描いて脈
打つのであるが、乳色の湯気はうすい戀人の中に幽靈
をゆあみさせた

私の乳房をふくんで ふくれてゆく湯の白い子供ら
の眞裸かなすこやかさを思ひ この肉の細細とつづく
限りに青いみちもみつけて

私は愛された皮膚のくぎりに指を並べる

五本の指のすき間をこぼれて光る影と白い處女の休
止符を追ひちつと湯槽に落ちてゆく。

☆

浴槽はほんやり頬紅をともしして肩のあたりづれ落ち
た黒髪は向日葵の派手なかさしをさし にほやかな肉
きれのかずかず光る夜空にのびるとき この裸形の悲
しみの靜脈を掘り喜びの動脈をさぐりあてた指紋はい
まし目をとぢてその指を落した

ふりほどきふりほどき手を舉げれば 飛び立つては
ばたくとりの跡に白い港が濡れ乍ら光り 影を落して
ひそむ燈台はすんなりと手をのばす その腕のうぶ毛
はびちびちとむかしにゐるはずのあなたの鼓動に又と
ためらひ

ふり掛る飛沫を拂ひのけはらひのけ 白い處女は肩
を胸をまろらかに張り 肉体はガラスとなつてつやゝ
かに沸騰点をめぐる 身内にゆきゝする腫の ランプ
にともすあかるさにゆだねた肢の温いあつみは ぬく
ぬくと涙の雫の化粧ふ下に盛り上る

寒天の胎兒

大 橋 正 種

枯木の指をねぢりあげて

かみつくツプラノを寒天にたくきつける……胎兒はそ

の上にはりつめる薄氷をきいんと叩いては

さん死したヒコグモの死面の糸を…一すぢ摘みとり…

ねぢり上げた指先より悲哀のむしとこぼれ落ちる赤い

音符を——その一つくを……

青い星にうつして青く染めては寒天に蹴りあげる…

胎兒は

春鶯の一聲をまつてゐる薄氷をかみ砕いて…

美しい情熱

青い小鳥は

ミルクの太陽をつかんでとんでしまった

故里の今日を

あの日のいさましい笑顔がかへつてきたのだ

白い船を

動かなくなつた エスカレーターに繋留で

私は 凝つとみつめる

ウイルチンスキーの廢歌を

私は哀しいレベルの墓地に…

金盞花をたゞいては

ヒマラヤの雪をちらした

おや！

——ミイラのすすり泣きがきこえる——

のびのびと戯れる

三日月をのせた

白鷺に…

嶺 皖 彦

言葉なく 姿なく 今 かへつてきたのだ

頭ふかくたれ 堵列する村人の
無作法も汚れた掌も忘れて 合掌するなかを
花環がしぐれる 遺品がむせんでゆく
後見送るさみしい呼吸 しめやかな囁き

歸郷

手をつかねて見てゐるのではない
この静謐なひとみに身を沈めてゐるのでもない
大氣のひそむ中を
ふてぶてしく斜面をせり上げながら
石灰層を露出しては流れる
庭程の村落を圍む山脈
しらく透いて見える静脈に
がつしりと摺んで見たいのだ

そつと聞いてゐる耳朶ちかく
ひとしほにひびきをかさねる波の音よ
ああ 喪の凱旋勇士
故里の今日をしづしづとかへつてきた かへつてきた
のだ

辻井健彦

織く打震ふ 觸指にゆれ
むかしの唄をはぐらかし 打ちたゝき
氣構えた肉体に疲れながら
手をつかねて見てゐるのではない
今日も暗い軒端に脈搏を数えてはゐるが
挑んで來るのを
蒼い微笑で待つてゐるのだ。

春を俟つ

渡船場に山椒色の草々が
うぶ毛のやうに光る頃
滿洲里から歸るあなたよ
春になつたなら——
髪も伸びやう
ふたありの息のつき穂に耳傾けやう
それとも
春風がひらいて行つた
青い書物のはちペーじに
別れの文字があつた時には

秋葉みさこ

胸底に
涙の湖をたゝへやう
さゞ波の音をいとしんで下さるから
春になつたなら——
いゝえ
おかへりを待たないで
流氷とともに
遠い遠い海に消えやう
そして海ほろづきを鳴らしてゐやう。

冬の日

北國の朝
なにもぬる色がないといふ をまえ

茅野信義

そして飛びたつ 小雀をかいで、
お母さんのためには
オムツの旗をかこうね
空はあんなにも青空だ

—おまえも おかき
鋭筆をなめて

おまえの貧しいお家をかき

きふるさとの山脈をかき

雪をかき

夕空の下には

懐しいお父さんのために

月

夜更の下通りは

およしとさつきと大黒と

月が出て居る

上をむいてるはんかけの月

腹立つ事も日々に少く

平和は馬鹿のやうに足重く

幸福はもや／＼と

月をあほいで歩く事も忘れて居た

日本の旗をかき

さあ みんなでてこい

暖い陽射に寝込ねこらんで

お伯父さんのケツサクが生れる

寺元亮子

月が出て居た

小賣屋の店々はぼろでとざされ

酒場の舗道ほどうだけ嘘のやうに明あく

この夜更を嘘のやうに

嘘のやうに月をみて歩き

不満な事も一つ二つはとり出してみる

—一・一七一

時

薪自動車のおへぐ坂道に

いらだつ家路も 自分のも

しめて出たまゝのノブの工合

無駄になつたドアの張紙に

淋しい安堵もある 日々ひびのくらし

手のうらにびくん／＼ 息するなまこの

冬の窓

起きぬけの花の香りは軽いめまひ、

海を越えて故郷の妹が蝶のやうな便り

鳶

鳶は孤を描く大きさのまわりで考へてゐる
餌をついばむ嘴をまぶかに下し考へてゐる

腹を割るわざにも馴れ

あるは きづだらけの眞魚板の

中へこみばかりのものうさ

去年のパーマネットはすでに消え

明治風な頭に豪華なオーバー

珊瑚の簪も さゝせる

—一・一八一

松下眞木子

窓を閉ぢ白いいきで繪のやうな手紙をかき

消しては書いてゐると手紙のやうな繪になつた

豊田春江

舞ひ上り舞ひおり黒く見える羽を帆船のやう
に張つて羽ばたき一つせず 考へてゐる、

つめたい水すましのひそけさで、ひかるあめ
魚の身のそらし方で

目をとちて斜めの軀を　じつと考へてゐる
木のでつべんから數丈高いこの空で、耳の奥に覺えて
ゐた海鳴りの音もきこえぬ高い位置で、しかも、まだ
木だちのところどころに残つてゐる夕映のうすべりに
斜めの影をすりよせるやうにして、
下界の地圖は次第に昏く小さく翹たがにつれてさかしま
になり、

思ひ切つてとび上つた世界はこんなに何もないとこ
ろか、右を見ても左を見てもこのやうに何にも見えな
いとかか、餌えさもないとかか、おいらの羽は死んでほ
ない
がくぶちを押し流すつめたい氣流である、

春の雨

二つは一つに擁して離れまいとする

がくぶちの地圖は兩はじをどこへやつたらう、考へて
も考へがほぐれぬ、こゝは高い空の上である。

おいらの古巢はどうしたらう、小さい不思議なおい
らの巢は。抜けた羽毛でかこつた糞くさい驅だけすつ
ぽり入るおいらの巢は、

もはや聲のひびかぬひと色の視野が鳶とあらそつて
ゐる。はみ出たがくぶちに、
あゝ何と奇妙なことよ、見える、見える、おいらの巢
が。

鳶は夢をみてゐる姿勢のまゝ頸を曲げ、兩脚の爪を
つまだゝせ、すでに翳つた雲に副ひ、体の大きさの毬
となつて、はるか高い空から降るやうに、今たしかに
見たと信じるおのが巢の方向へおちていつた。

江越馨

恰も一莖の花のやうに

満ち足りやうとする疲労

いつの世にもつれないのは季節の風。

一片の瓣さへも散らすまいと希ふ心と心と
を、あつけなくも引き離す季節の雨。

春の雨、吾がともし灯暗く
揺れつ瞬く果敢さ、佗しさ。

月との會合

糸の切れた風船玉に似て
椎の木にかゝる月よ

やさしい眼でわたしを眺みるな
歪こじんだブリキの心臓こころに

何のなにの脈もうたない
川縁かわのへりの未亡人の別荘にはオリーブ色のカーテンが
降りてゐる

レンヂ窓から赤いリボンの少女の影は水に碎けては流
る

ちつた　ちつた　音もなく――

花よ　花よ　花のさだめよ！未にその心忘わすれず。

私の獻款が、彼女の嗚咽が――空しき巷の春の雨。
忘れず　今も　噫！
生きる限り　（T子へ）一九三九・八中流

上松ちか子

月よお前はコスモポリタンだ
今夜も思ひ切り　放浪するがよい

わたしは新しい石鹼の匂ひのするシートの中にもぐり
込こもう

やがて明け方人參色の太陽は蔷薇色の裳裾を曳いて姿
を見せたら
お前にはぶ銀の光の中に
昨夜の記憶から忘れられて行くのだ

奔騰の鞭

佐藤青雅

奔騰の酷しい鞭よ

憂悶の泪を嚙んで

敷藁に呻吟する瘠馬だ

縛鎖の重量

せめて糧槽の愁香に

首垂れて睡らう。

もぐらの式辭

八乙女猿助

ちよつくら、今日の祝賀會にお祝ひ言申しのべますで
がす「人間ども」がひとつ残らずおつ死んで種切れに
なつたといふことは、實に慶賀にたえない祝福すべき
最大のことでございますがす

わつしが、この「人間ども」のおつ死んで種切れとな
つた事について、ちよつくら、皆様に報告出来るとい
ふことは光榮の至りでございますがす。

そもそも「人間ども」がどうして死に切れたかと申し
ますと、他人に負けんと物を食べすぎたからがす胃

弱で青うなつて、青い酸い水吐いて、たんとおつ死ぬ
し、河が何故、高い山脈の頂上に流れて行かないがち
ゆう事を百年も萬年も考へた末、脳味噌がふやけて死
んだのや、お白粉を塗り過ぎての窒息も多いし、強盜
が多くなりピストルの弾丸が賣れすぎたことも一起因、
行儀を良くしたため、筋肉と骨格が痲痺した奴、星な
どレンズで見過ぎて眼からこはれていつた天文學者動
物、植物、鑛物、塵埃など

みんな俺のもんだと思ひ込んで、持ち過ぎて疲れて死
んだのや、反對に、何も不用だと口先で云つて、自殺

がす

つてものをした者もある、そもそも「人間ども」がど
うして死に切れたか申しますと、わつしには以上、ほ
んの一片鱗より知らないのがす

また、ここに一段に祝賀すべきことは、「人間ども」
におべつかをつかふ事によつて、我々より幾らか上品
だと思ひ過ぎてゐたところ、犬・猫・鶏らが「人間ど
も」と共、ひとつ残らず死に絶えた事でございます

或る額縁

褪彩美智正

夕

空が入墨をしたりするので

秋は

やくざな子を持つた母を泣かせる

父

それはかたくな、塑像の別名であらうと
心に木枯しの風が吹いて

頭上は既に冬景色であつた

そして

渡り鳥は杳い他國の空で

翼を失つた郷愁に悶へてゐるであらう

と

たまゆら そんな悲しみを

貧しい私の額縁の中にはめてみたり

エメラルド・グリーンの霧の晝いた幻影であらうか

掟は生活を支配すべきか

上田康

あゝ
トレモロを奏でる晩鐘があらうとは……

肉を撲つ鞭は 憎しみか 愛か
慟哭は 怯懦か

ボン、ボン、
還つて来る

神は救はないのか

海原は 紫紺で
天穹は 葦色だつた

問題は 麵麩か

麵麩だけか

をとこは

肉を撲つ鞭は 憎しみか 愛か

をんなに
ぎやうぎ芝の地下莖で
腕環を拵へてゐた

想ひ出

感性の手毬は

膨み

をんなは

弾んで

デイトリツヒの媚態を真似

掌に

生きる愉しさの表現を考へてゐた

夜 鴉

竹岡範緒

ふと 蒼い湖に浮んだ胸の奥 でも
つねに わたしに唾を吐く群れがあり

堤を隔てての しばしの慰にすら
きしりあひ

そしりあひ

ねたみあひ

愛と死と 生臭く血に塗れたはらからよ

たち割られた 背肉の痛恨の

凭るべきそふあさへない あけくれ

そは

すり落ちてゆく細い首筋を夜毎かきならす

自嘲の哀歌か。

わたしは知る いつどこであつても

ひようひようと木枯の吹くさなかに

消えてゆく友人
消へてゆく友
そして あゝ 消へてゆく母よ

與ふべき一つの言葉さへなく またしても
ちぐはぐな生活の戸を こじあけてくる

精密な秩序と ダイナミックな微笑をはらんだ
白い朝を 共に雄々しく迎へねばならない

肺を病む友の青く笑ふ頬に

女はチラチラと白金の微笑を降らし

愛と死と

擴がりゆく透明な空を 鮮紅の血に染め

力一杯 夜鴉が鳴く

—昭和十四年十二月廿日—

二見の浦で

野 田 久 子

しぶきの顔に飛びさうな波の音に町が目ざめてゆく時、

日の出を拜まうとざわめく人々の聲が新しい年の門出を破つた。

貝材具を手にした私に馴れた賣子の聲が胸にバタ／＼と折りこまれて

温まらない氣持で人々に採まれかけた、

ひえきつた岩にグツとほくをおしつける時

希望だけで何もいらなと思つた、

朝熊の頂上に何物かを求めて息切らす時、
連々と遠く靡く山々の重りと
眼下に雑木の厳しい傾斜を見る
その真中に箱庭のやうな伊勢の町を見出す。
ばう／＼と髪をなぶる風に私は美しい寒さを見出した。
讀經の淋しさと
コツコツと上る下駄の音に
新しい年が迎へられさうで私はほくえんでおみくじを
引くのでした。

朝熊の頂上

釣 (白鮎釣)

冬 木 岐 之 介

ザクツク・ザクツ 魚鱗形の砂 丘を越えた眼にぐつと迫る 碧い磨かれた輕金の水、俺は愛用の釣竿にネオンの光に似たテグスをほぐす、小さい釣針とともに……あの深水中スパークする魚のビツチ 交錯する魚魚魚：堰かけた水の氾濫が野生の生誕を押し流す

俺は鋭いフェンシングの劍士、柔軟な竹竿をビュンと振り込む、空の白光、つぶらな瞳、浮木の流がウインクして凍花の凝視、そして軽いタツチ
E線上を走る烈しいトレロモ、腕を全身を張つた絃に酔はせると健康はビチビチと鳴る

水のヴェールした嬌奢な白鮎、銀嶺の肌、素晴らしい流線、そのダイヴする戯れごと…

朧なす舞台

宮 川 蜻 兒

薄紅色のキャンバスを眞黒な繪具でふとも埋めてしまつた

その中にボンヤリと白い馬の首が浮ぶ

この繪は金屬性の額縁を希んでゐる

長い半島服の素晴らしい明るい白

緑と朱とのくまどり、が仄かに花となる
脚光のアリラン唄の娘に、ん、くの匂が……
赤いエナメル帽を被つた青年たちは
悲哀も憤激も忘れてラツパを吹き立てる
どこからともなくゆら／＼と僅かな雪が……

黃風來たる時

川崎匡太郎

瞠若、
私は中宵の寢台に醒める。
月は爛れ、星座は墮ち
城市・牌樓・運河
今や總てに晚鴉の如く姿なく、色彩なく、
朔風はゴビの邊疆に砂を捲き
暮地として北支の空へ翱翔し來たる。
それら萬仞の黄塵、
耳底を洗ひ、婆々と血行に馳騁する時、
あゝ、私は手にする
遠しくも捲られる歴史の頁を

疲 睡

花鶏らの明るいざわめきはおとろへ
彩られた時刻は躊躇ひながら

國 分 尚 治

扉の向ふに遠のく……
くろきはしめつて花園の底に沈んでいく

神々の衣裳を

刹那、無窮の稻妻が射貫く。

それら蠕動旋渦のなか、

我が同胞に擬せられたる銃口の

炯々たるを

おゝ、見る！見る！

厩邀の彼方・天涯の果

一切を浸蝕しつくさんとする舌の音を

地核より突兀として燃え騰り來る

新しき生命を、

(いま疲れた思念に

わたしは哀しく眠る)

ひとときひかりは杳な山脈に羞ぢらふてゐた

すでに植物の訣別の挨拶は

夕暮にしらじらとながれ

雨 の 夜

稻 垣 美 子

蜘蛛の巢を吸ひつけた門柱の下、燈は凝固した水蒸
氣に包まれて櫻貝を窺ひ、少女の日の憶ひを烟ぶす。
家々の軒に散る電氣火花は、青春の終りを祭るか、
病む友もこの饜應に、細き手へ口づけをせよ。
耳梳る雨、齒並揃へれば、霜降りの闇に木々がその
本性を顯しはじめる。

藪の木は黒い掌を擴げ、笑くぼの群を抱き、梧桐が
濁つた思考力に蠢めく、老松は針を隠して己が体臭を
嗅ぎ續ける。

夜蟬が頭蓋骨を打ち割つて落ちると、濡れ苔は木々
の幹を流れて、竹縁に視力なき晝顔の息吹はくもり、
錆び付く、私のそれにも似て。

帶 止

西 本 輝 子

空の青さを指につけてなめやう

それははつかのやうに頭を澄ませてくれるかも知れない
つきぬけた青さの中にきれぎれに雲が流れる

をそれ辿つていつた視線がふと蝗の姿をとらへた

蝗は私の帯に止り……

貴方を包み去つた硝煙がただようてくる

煙の中でほゝえんだ貴方の笑顔をのせて

大陸からの言葉は雲は蝗に托し

帯の上から胸に傳へてくれた

けれど蝗の長肢はおそく

それは空しい言傳となり……

貴方は雲の中から追伸をつぶやく

蝗は帯にをさまり

貴方の笑顔は蝗におさまり……

私は胸に手をあて蝗を愛撫する

空の青さを指につけてなめたら
煙と血の匂がした

本會メンバー関係詩誌紹介（順不同）

- ☆ 北方詩族（木村茂雄）函館市時任町三全社
- ☆ 香川詩壇（柴俊介・立木冬雄）香川縣綾歌郡端岡村柴俊介方香川詩話會
- ☆ 鶴（小池亮夫）大連市須磨町五二八木橋方鶴發行所
- ☆ 言靈（渡邊曠彦）東京市世田谷區三ノ二二四一坂本浩方全社
- ☆ 生きちよるか（葛井和雄）高知縣香美郡夜須村西山八七四立仙方土佐文學社
- ☆ 山畑（茅野信義・上松ちか子・橋本史芳）富山市東千石町八七全詩社
- ☆ 作家街（後藤敏夫・寺本亮子）大阪市港區九條通三丁目五三九全發行所
- ☆ 八幡船（越智彈政、岡田武雄、清水健士）八幡市枝光堂山町二丁目玄海灘詩人聯盟
- ☆ 詩性（挽地英夫）仙台市同心町通四十六番地挽地方全社
- ☆ ル・バル（岩谷健司）東京市豊島區池袋二ノ九五五島田方ルナ・クラブ
- ☆ 茉莉花（濱名與志春）大阪市東淀川區元今里北通二ノ四（北村方）全編輯所
- ☆ ごろつちよ（豊田春江）東京市豊島區雜司ヶ谷二ノ五〇坂本方全社

フツク・レビユ

一九三五年以來日本に於ける浪漫派の新展開は純粹詩の基地から立ち昇つて多種多様のヴァリエテを描いた。未知のリアリテへの探求は能動的な詩人の群に依つて新しい美意識を創造した。知性の醸す縦横の技術が單なる心象の擴大と強化にのみ用ひられたに反して對象の本質的な存在を認識し暗示する創造性に迄昂揚された極点は執拗な自我の廣汎な捕獲であると見做す見解に迄も到達した。存在（エートル）の對象は現實のみではなく、それを詩化する自我の存在と一致する處に浪漫派の新しい徑が開かれよう。新人濱名與志春の評論集「現代詩に關する七つのテオリア」は之等の各立場の技術を詳細した。

その第一章に對象と自我との相互的限定と、創造的手法の確立の概念を述べ、第二章「ミュトス河の流域」に新しい至純なそして強靱なリリズムを唱へ、「浪漫主義の批判」に於てノヴァリスの自由主義的な情感表現の單純性に一つの手法を示し「リアリテの周圍」の優しい隨筆風な筆致の裡に詩のモチーフとしての現實の正しき認識を教へ「詩に於ける現實性について」詩と科學に對する一つの示唆を與へ浪漫派の英詩に於ける傳統と批判精神を動員して詩法上の諸問題に言及、第五章に詩文學の社會的現象としての使命を説く、更に「詩と音樂との交渉について」ドビュッシイの印象主義が詩を如何に取入れていつたか

を述べたが、之は稍々常識的ではあるが一般藝術には視野の狭い、特に音樂的認識や知識のない人々には好個の讀物であらうこの本の装幀は大變凝つたものではあるが、エッセイ集にはふさはしくないと思ふ抒情詩集の装幀を感ぜしめられる。木村茂雄の「貝殻目誌」と村木雄一の「ダンダラ詩集」とはともに北海道の一角に擡頭した精巧な美しい動く機械である。そこにはサタイヤや機智さへもアスピリンのやうに美しく輝いてゐる。前者木村茂雄は繪畫的なものに對する深い理解を多大に作品に示し、後者村木雄一は映畫のモンタージュ的手法の詩的効果を單純化に據つて動的に示さんとしてゐるかに感ぜられる。乍然、これらの手法が悉く成功してゐるとは斷言出来得ない、語句の聯想性に稍々理窟に墮ちた嫌も幾分存在してゐる事を指摘して置く必要があらう。

小冊子ながら塩谷安郎の「招待状」は興味を以て一讀した。この詩集は大正期に發生した所謂自由詩の角度と手法とを忠實に展開した作品で充されてはゐるが、讀者は其處に何ら過去の詩感を受け得ない。大正期の自由詩的手法の一切が如何なる新改革に依つて現代詩法と對立出来得るかといふ問題を提出してゐる。このタンク型のシリシリと地味に前進する作者の体得した力は恐るべきものがある。前述の意味に於て集中の作品は成功失敗相半ばしてゐる。西山五百枝の「海洋底質」は島嶼的民衆の特性に凝視を放つた地理的情感に中心を置いた作者長年の企圖の第二業績である。海洋文學は當然この國に擡頭せねばな

らぬが掛聲ばかりで何らの現象も認められなかつた。僅かに少數の詩人が試みたに過ぎぬ。この詩集は幾分表現法に不洗練な点はあるとしても日本詩の内容的な一つの方向を示してゐる。安達太郎の「古事記愛誦」も日本の古典に對する詩的挑戦を試みてゐるもので、その詩法の象徴性と具象化に未だ原書の生命力を完全に現代的消化してゐない欠点はあるとしても、この國の新しいアルカイスムへの一試作として認めて宜しからう。筆者も嘗て「碧巖錄」の現代詩化を二三篇試みて見たこともあるが、具象化の語感に現代性が稀薄になる嫌が多かつた事を告白して置く。

丹羽哲夫の「緑の假睡」と木下夕爾の「田舎の食卓」は併に昨年度中の優位を占める詩集である事は評者の意見の一致する處である。各作者の角度及詩法、亦その前途への暗示に關しては筆者は兩書の序文中に詳述して置いたので此處では省略するのであるが、前者の純粹詩にプラスするものを持つといふ企圖更に其の手法としての數々の試練は現代詩に課せられた最大の問題であり、この至難な道程に敢然として進む作者の角度は高く評價してよいと思ふ。尙、後者の新らしいリリズム、柔弱な情緒を排して明快玲瓏な感覺を完璧に迄揚止した名詩篇の蒐集は現代日本にその類を同じくする人を求める事は恐らく至難であらう。しかもこの作者は既に之の詩境を脱せんとしてゐる彼の新轉向こそ吾々の注目を倍加する處である。

珍らしく編者の手もとへ二つの歌集が届けられた。一つは山

裾野はあらはれわたる溶岩にうすき冬日の

しみ入る閑けき

(富士吉田)

山 宮 允

「虚日集」より

丁度ペンを擱いた處へ村野四郎の「体操詩集」が到着した。これはスポーツに關する詩篇と印畫藝術とを構成した新企圖の詩集である。此處には流れてやまぬ動的な直線が唸つてゐる。空間に捕えたメタフィジツクな文字のフィルム、その各齣を爽快な近代的な明確の知性がスポーツのあらゆる姿態を深度鋭く昂揚してゐる。そして長年の訓練に據る詩句の洗練化と單性化此處では健康な思想の花々が新時代の秩序の美しい体操を演じてゐる。更にリーフエンシユターの鋭角性もホオウル・ウォルフの強靱性とが之の詩篇の對象を調子よく支へてゐる。唯銅版印刷に今一層の精巧性が望ましかつた。恐らく之の詩集は昭和十四年度の掉尾を飾るよき收穫であらう。(梶浦生)

前 輯 の 反 響

「血を呼ぶ埴輪」ハ滯腐シタ現日本詩壇ニハ洵ニ名エツセイト拜シマシタ。(北京・小池亮夫) 梶浦氏の「血を呼ぶ埴輪」は現在の詩壇に味ふべき文章であります。詩作品では丹羽氏の「臙脂の焰」「出發」木下氏の「青銅の夏」柴俊介氏の「晩秋景」梶浦氏の「巨女の目覺め」「綠蔭」等各詩人の近作味讀致

下陸奥を中心とする歌誌「一路」の同人集であり一つは嘗て古典的傾向の詩篇を以て雄飛してゐた山宮允の「虚日集」である。ともに定型律の短歌集である。一般に吾々の観点からすると定型の詩歌は原則的に普及性を多分に有してゐる。大衆は凡て表現法に恐怖と困難とを感じる。何故なら内容に應ずる一篇毎の創造性を自由型詩は要求するからである。内容が形式を規定し形式が内容を規定するといふ因果關係を考慮する刻、筆者は定型詩に對して一つの恐怖を感じずにはゐられない。何でもない内容でも卅一文字に嵌め込んで見ると詩歌らしい感じがする。形式のもつリリズムの力が内容を救助シカバアしてゐるからだ。此處で短歌論を始めても困るので筆者の門外漢的嗜好で以て秀歌を一二採つて見よう。

は母のこ言ふ人々のなくなりてひとり思ふは

たのしかりけり

山 下 陸 奥

盛り場にたのしみ歩く混雑に物へだ、れる

月低く出でぬ

石 垣 千 代 松

弟子二人打ち下す鐘のくるひなく師は燒金に受けて

たしかに

(刀鍛治)

平 野 梶 子

以上「一路集」より

しました(高木秀吉)編輯の立派さに敬意を表します、すぐれた作品も數多く評見いたし喜び居ります、(詩の領海)の率直明快さに頼母しいはりを感じます(山田岩三郎)立派な御研究やよき御作品に接し洵に得る處多大でございます(田中冬二)かゝる時、これだけのものを刊行する勞大變なこと、想像しその努力に敬意を表します。「血を呼ぶ埴輪」ことの外興味深く拜讀しこの時評の的確さをた、へます。新人として丹羽「出發」木村、清水、葛井、渡邊、塩谷「晩鐘」長谷川、諸君の詩の美しさと純粹性を大いに買ひたいと思ひます。梶浦氏のは毎號磐石の重きをなすものと感心してゐます(杉浦伊作)「巨女」の御作拜誦。讀みゆくに随ひ眼擦めき行く如く盛り上り盛上り最後に到つてクローズアップされる意識は誠にフォルマリズムの極まで存じました。尙、安田吾朗氏の詩集紹介中「倚子の浮んだ空」は小生昨年五月發刊の「げんせ」中「春の風」の中の又「詩文」本輯の「愛」の中の字句にして、空が青し又は空に雲あり等の常套句とは異り、この様な同一の語句が異なる所より出るのは何となく不自然な不愉快でした(堀口太平)「血を呼ぶ埴輪」梶浦氏、論旨明確です。そして眞に詩の研究に長い努力をされたことがはつきり讀みとされるのです。私の考へでは、だが實踐第一です。人生の爲以外に藝術は無いと思ひます。勿論分析研究も自分の詩作の進展の爲にやるのです。私にはそれよりも多忙な生活現象が長時間を私からうばつてゐるのですから。「詩の領海」塩野氏、よく判りましたが言はんでもいゝ氣

もしました。作品では丹羽氏少年らしい美しき。木下氏「青銅の夏」もつと鮮明です適當の冷靜さと抒情性を持った主智的手法を駆使してゐますこの人の鏡のやうな感受性は良質でせうたゞ少し力が欲しいと思ひます。挽地氏新居記すこしキメが伸びてゐますが素質も發展性も見えろと思ひます。梶浦氏では「綠蔭」の方法的完成と爽快な抒情を好みます。「巨女の目覺め」は言葉と對象の距離があるやうです。エリュアルもいま讀むと別に日本の一流を抜いてゐるか？です（谷村博武）今度の梶浦氏作二篇、さすが我ら黃嘴兒の遠く及ばぬ堂々たるものだと思ひました。（木下夕爾）當地は日本の書店が一軒もない不便なところですので第四輯大變うれしく拜讀、御誌のことなとこちらの新聞紙に書かせて頂きます：略：在滿洲龍江省岩本修藏）「詩文」も名聲さか御座成的な人達を廢して新らしい詩を建設しようとする人達が第一線に起つてゐられる強味を發揮せられて來た事が何か親味が感じられて來ました。私もみつちり會員の人達の背後からい、詩を書かして頂きます。（岡田武雄）

メンバア消息

- 詩文學研究会——本會中部地方會員主催客年十月二十二日尾張橋下園。十八名出席。
- 津坂霞氏（會友）——客年十月五日急逝。本會より弔辭を贈つた。
- 濱名與志春詩論集「現代詩に關する七つのテオリア」出版記

- 念會。十一月十一日大阪新町ねげ堂で在阪詩人諸氏發起開催
- 西山五百枝氏——詩集「海洋底質」發刊。
 - 塩谷安郎氏——詩集「招待狀」發刊。
 - 松村一美氏——客年十一月十二日久留米商工會議所に於ける「詩と講演と音樂の會」に詩の朗讀をされた。
 - 中京詩人會第二回——舊臘三日名古屋公園前養生堂にて十五名出席。
 - 詩文學講習會——第一回客年十一月五日、第二回十一月十九日於榎下園。講師梶浦正之氏。講義科目、詩學概論、演習、詩史（日本及歐米）會費無料聽講希望者は愛知縣佐織町勝幡港屋内宮川蜻兒宛申込の事、會場日時等通知す。
 - 梶浦正之氏——舊臘癸の手術。目下全癒。
 - 後藤敏夫氏——一月二日編輯部梶浦宅訪問。
 - 清水達氏——詩集「航海」を發刊。
 - 木村茂雄氏——詩集「奇妙な街」發刊。
 - 寺元亮子——詩集「地衣帯」發刊。
 - 石川縣詩話會——二月三日小松町山川書店に於て中村白鳳、打和長江、山田彌三平、小山恒兒、上松ちか子の諸氏出席。
 - 竹内一氏——詩集「審美章」發刊。
 - 多賀城氏——北京特務機關に赴任、二月十七日下關市で壯行會が催された。
 - 木下夕爾氏——詩集「田舎の食卓」（本會刊行）は文藝汎論第六回詩集賞を獲得。

★ 試 作 欄 ★

ナ ガ メ 柱 美 津 夫

薄 暮 山 口 眞 佐 子

青イバラソルヲ精一パイ開イタラ、
工場ノエントツハ バラマカレタムギカラトンボニ
イブタバコヲカガシテイル。

高イ丘カラ化粧品店ニ似タ町ヲ見下ス僕タチノ石膏マス
クラ ビタオールノ白イ手ガナデル。

ト、
店ノ通りヲ赤イオケラ型自動車ガ
カラカラト笛ヲ吹イテ通ツタ。
日アタリノヌクイ白兔ノ背ニ

ホウリ出サレタボクタチハ
鯨鯨ノ口ヲソロヘテ
聲カギリ

オタマヂヤクシヲ吐キダスノダツタ。

落ちてゆく日輪の金色の矢にさゝれ
哀しくも眼とぢる籬の山茶花

築山の背から低い歌聲のやうに
茜色の幕が黒ずんだ影を染め始めた

荒地の中に私の二つの腫の青い翅は亂れて
疲れた野良着と葱の一束とを携へ
裸の柿畑を過り來る老父の姿にひれ伏す

老父と並んだ私は盲た少女に似て
夕暗を仄かに顔はす遠い氣笛に
泥まみれの父の手をさぐりながら
笑顔で征つた兄へ日の丸の旗をふる

雪が降つて
雪がつもつて

華やかな温室で 花々は 合唱して
少年は 銀色のハモニカを
キラキラさせて

女は 寢臺の中で芥子の花になつて
その音がくにききほれて

小鳥は 女の顔に 戀して

小鳥は 凍えて

その鈴がきこへて

雪が降つて

雪がつもつて

曉穹へ咆哮を潤げて はやくも眼醒める製鋼工場。
濃霧から流れる光は鐵塊交りだ。

オイルは凍つて固く沈澱し——
齒輪の轟音と逞しい鐵腕の男達と瞬電の迅さをもつて交錯するその陰翳。

(君達よ、この凄まじい氣流に觸れてみるがい)

じつとりと赤銅に煤けた額を拭き灼鋼の匂に叫喚する男
たち。

パチパチツと男達の半裸肌で灼熱の脚光が弾け飛ぶと

——よーし止める。

まつ濃い眉毛の下で荒ぼい眸が微笑ふのだ。

(だが、この男達の胸に可憐な花が匂つてゐることを誰
が知らう)

夕風が双物のやうな鋭さで吹きぬける。

建竝ぶ尖い屋根が斜線を伸ばす。

そのころ

油の滲んだ作業服の背に爽やかな生活が誕生した。

並 本 路 抄

安 井 正 三

冬夜。

私は影を歩きました。

海鳥が

オホツクの空から

風信を持つて来て止つた、
たへず微動する

並木路の枝に 枝に。

ヘッドライトが

とある街角で消へると、

月光だけが佗びしく、

寝入つてゐる人々の窓に差入つていつた。

梟の眼。

猫の眼。

夜の眼。

私の眼。

寒さが鼻をついた、

蛇腹のやうに白い舗道には

点々と血痕が續く

凝

視

加 藤 俊 吉

読み疲れ、生活に疲れ

ぐつたりと、藤椅子に凭れかゝる

仰ぎ見た刹那

冴えきつた月光

玻璃窓を通して、顔に一杯に降りかゝつてきた、

暗紫色の空間を

月明のほとりを

蒼白い光を浴びた綿雲が

切れては續き、續いては切れ

北東に流れてゆく、
玻璃窓の生きたカンバスは
夜光の瞳もて
恒鬱い数々の惱みを秘めたまゝ、
何時までも何時までも
私を凝視める

不思議な練習曲

田中律

汽車の眠りうちでXに組むだ胸の双手

幕を閉ぢる私の耳は

この美しい眠に一つの流を聞く

車輪の響を透してくる小川の流……若鮎の流線

この静かな線律の牙へは誰の奏であらうか

幻を否定し去る夢か 失はれゆく青春の日か

だが、私はこのやうに地球を廻るのだ

X型に手を組むだまゝに

發車 福井鋭三

シグナルガコバルトの花を咲かす
シヨベルの逞しさが炎の嵐を送る
蹙壓力計は生きもののやうに動き
定壓一四疋、機關室内の空気が
長い地平線と空とへあこがれる

機士と助手とは出發信號を電光のやうに取り
秒を刻む時計の針とともに呼動を鳴らす

沈點を破る汽笛 徐々に開く加減辨

ほとぼしり出る排氣壓音が鐵路に霧を撒く

助手の巧な腕の艶に半疋も下らぬ蹙壓力計

機士の雄々しさ 昨日の花々と明日の生々とした聲々を

乗せて

不動の姿に生きた機械の出發だ

初秋 伊藤智海

曙よ 扉を洩れる斜陽に靈氣と祈りととの交射する處、一

点の衰への蠅は魅る。

眞晝よ、梢は葉を落して愈々牙へ渡る、若者の胸に似た
陽は炎え わが胸に映る碧空の鏡

黄昏よ、暮色のヴェールにつままれた木や草は警鐘に顫
えながら明日の林檎の陽を俟つ。

あさひ 衣笠夢二

山莊の夢を閉ぢた窓ガラスに
日輪は二つに割れて

ぼくの瞳孔は枯れた樹木を映さない色盲だ

ぼくの影が椅子に細くなつて

腐つた林檎の紫に沈むと

白鳥は赤い翼に變色して

「日輪」の宮居高く翔んでゆく
鋭い直線の幻惑

偶然 横田實

(嘘を 嘘と云つた事から)

どろどろに溶けたアスファルトの街路にある

内脣のない はだか人形を拾つて

魂を入れなさいといはれますが……

ポブラが風に揺れたなんて

それはあなたの昔話です

あなたの魂が もうとつくに

エーテルの琴線をつたはつて

その人形に満ち満ちてるではありませんか

煙 小松信彦

きよらかな秋の朝――

散りしいた落葉をはきあつめて少女は火をつけた

むらさきの煙がこがねいろの落葉からたちのぼつて

あをい空たかくしすかに消えていつた

空をあほぐ少女の瞳には
露のやうな郷愁がこぼれてゐた
きよらかな秋の朝——

寫 眞 福島源次郎

木枯のやうに冷たく去つた彼女
だが、その寫眞は燦のやうに慕しい
古い化石となつた初戀の斷片

かつての日、風と太陽とが戦つてゐた
かつての日、美しい聲と姿とが僕を搏つてゐた

なつかしい癖よ、左肩を上げながら
「なあに」と囁く小栗鼠の瞳……

斷髪が青い世のやうに振り上る
その中に甘い花の香を僕は探した
いまある寫眞の微笑に似たやうな……

病床にて 森 昌 子

——渡支近き日に——

白いベットから見える窓枠の蒼空の深さを愛でながら
やがて彷徨ふ異境の草木と寂しい自らの姿とのよるべな
い想ひを漂はせる頃
秋冷となつて傳はつて来るは空しい飛行機の爆音や廊
下の光に聲高に話す女達であつた。疼く傷痕の上に細い
葩のやうな手を當てて 妾の仄かな獨白は流れ出る涙の
艶のみ徒らに美しく——たゞひとり、遅れ咲きの山茶花
のやう……——いつとはなく瞳の陰から涙はエーテルの
やうに消え失せ 冴へ渡る諦が訪れて来たそれは氷とな
る流れのやうに また砂堤を越える夕潮のやうに……

☆本會取次詩書紹介☆

木村茂雄「奇妙な街」「ならん庇護のもの
ない状態は、精神の破片で痛い、なぜこんな
街へ迷ひこんだのか」といふモダニストの苦
惱は表現派以後の普遍的詩性である。聯想の
奇怪な迷宮を新しい言語に置き換へられる事
に依つて現代詩は一と先づ安定の位置を求め
る。しかし作者の視ふ處は今一つの迷路であ
る。この洗練性、この昂揚性、勇敢な作者は
クシヤミした夕暮のネオンの街で今一つの確
立すべき精神の探求を始めてゐる、現代詩の
方向に重要な暗示を抛げてゐる詩集だ。

清水達詩集「航海」聯想の新鮮を以て特異
な風格を芽生した作者は本詩集では頗る落着
いてゐる。手固い自由詩傳統のスタイルも取
入れてゐて、角度が稍々弛緩した嫌はあるが
逞しい意欲がシツクな手法に巧妙に織り込ま
れてゐる。この新銳の前途には期待してよい
竹内一詩集「審美章」（四六判）刷肖像
寫真入頰五拾錢）作者は、その弾力ある精神

の飛躍、柔軟なる言語の肉附の豊饒性に於て
若くして既に一家の風格を示す詩人である。
かり判刷の素朴なる趣味は愛すべきではある
が、この優れた詩品にはふさはしくない。

十時延子詩集「花季」（四六判 價壹圓八
拾錢）歌集に見る如き美麗優雅な装幀と堂々
二百余頁の立派なもの。純情な素材と自由な
形態とが年齢的な哀愁の花季を齎らしてゐて
可憐な部室や小川の唄などを想はせるもの。

三吉良太郎詩集「秩序なき貌」（四六判箱
入價七拾錢）この暗示的な題名は必ずしも内
容する詩篇の傾向とは一致しない。老巧と思
惟される迄の激しい現實への意圖は美しく秩
序されてゐて寧ろ作者の用意周到な詩法が反
つて作品に生硬感を與へてゐる程だ。とまれ
完成された作品に充ちてゐるよき詩集であら
う。

田村昌由詩集「戒具」（四六判 厚表紙價
壹圓五拾錢）作者は徹底的にリアリズムに立
脚する新人であるが、これらの詩品は所謂人
生派の樂屋落的咏嘆とは比較にならぬ程新鮮
な角度と素材とを現實感に昂めてゐる。

村野四郎 体操詩集

文藝汎論詩集賞獲得!

（四六判豪華版）送拾四錢

村木雄一 ダンガラ詩集

（四六判フランス装）送六錢

安達太郎 古事記愛誦

（四六判背布）送拾錢

△注 意 ▽

- 入會希望者は作品に返信料を添へ會
則を請求されたし。
- 寄贈されたる新刊詩書並に詩誌の批
評紹介をなす。
- 本會發刊の詩書及詩誌見本希望者は
返信料を添へ申込次第詳細通知す
- 次輯原稿會費締切四月十日
- 右の通信はすべて左記編纂者宛の事

愛知縣海部郡佐藤町勝橋 鹿浦正 之
掛巻口座名古屋二四八三五

編輯後記

本輯はポウドレイルに關するエッセイなど蒐めてみた。いづれも抄譯ではあるが、各方面の角度から之の巨人を觀察したもので多少の意義はあらうと思ふ。泰西〇人に限らず吾國の先輩への檢討も此後時折試みて見たい、適當な人選を仲間諸氏へ御願して置く。何しろ限られた頁の中での仕事で不自由な事夥しく、ために會員數氏の長い作品は特別二段組とした諒とされたい。事局の影響で多くの雜誌が消えて行くのは寂しい。しかし、本誌は如何なる犠牲を拂つても續刊する。幸に吾々の献身的詩業に理解ある眞摯な人々が屬々加盟されるので力強い限りである。尙、仲間諸氏に今少し早く原稿を届けられるよう特に御願ひしたい。春暖、諸氏の健筆と自愛を祈る。

詩文第 季文第
編輯者 詩文學研究會
發行所 東京市麻布區霞町一番地
印刷所 堀口太平
東京市麻布區霞町一番地

發行所 詩文學研究會

發賣所 東京市神田區神保町 上田屋書店
大賣捌所 東京堂 東海堂 北隆館 大東館

昭和十五年三月十五日印刷
昭和十五年三月二十日發行
【定價八拾錢】

濱名與志春著	現代詩 <small>七つ</small> のテオリア	菊美半本載	送定價拾壹圓四貳拾錢
丹羽哲夫詩集	綠の假睡	新菊半載 アト紙美本	送定價六壹圓
木村茂雄詩集	奇妙な街	最菊新刊製	送定價拾壹圓四拾錢
清水達詩集	航海	布新裝菊幀判	送定價拾壹圓八拾錢
國廣勝太郎詩集	天使の饗宴	絶版近し	送定價六六拾錢
寺元亮子詩集	地衣帶	百四十六頁判	送定價拾壹圓四拾錢
川口敏男詩集	花に流れる水	殘部僅少	送定價拾壹圓四拾錢
塩野保男著	詩とアフォリズム 投錨	殘部僅少	送定價拾壹圓四拾錢
塩谷安郎詩集	招待狀	好評噴々	送定價六五拾錢
詩文學研究	第一輯 定價八拾錢 第二輯・第三輯 各定價六拾錢 第四輯 定價七拾錢		

發行・取次 詩文學研究會 東京市麻布區霞町壹番地

△讀者の聲▽この豪華さに一驚再嘆久しう詩書に乏しい本棚に常盤樹のやうな生彩を放つて作品聖書のやうに一枚一枚拜見(嶺峯彦) いつも乍らの新鮮な詩風優雅な情緒に感服おく能はず(ヨネ・ノグチ) 諸式統制の折柄かやうな御出版には容易ならぬ御苦心のあつたことと推察その貴重な一冊(山宮允) 鶯色の月を拜見してから何年になりませう、あの詩集からも忘れ得ぬ御作品がありました。青風中では湖心の諸篇闊湖心ヲフカチオ・ヘルンの舊居雪夜地球の圓味を感ずるが光り多秋二篇の明るさも好ましく青風は流石に力作私はフロオベルのサラムボウの美しい描寫精緻な描寫を聯想、冬の夜を愉しく拜讀(田中冬二) 雄大無比な詩集驚歎甚だ失禮ですが期待以上のものでした。(木村茂雄) 高雅清純の香氣 ☆ に充ちた詩集を拜見するよろこびは純一無二のものでございます。(岩佐東一郎) 一讀してその詩格の立派さに感動いたし根據の深さ、感動のはるかさを感受、斯様な詩のひろくゆき渡らない事を遺憾に存じます(高村光太郎) 壯大且華麗な御本を開いていくたびか御作を拜唱し心愉しむ事が出来ました特にあなたの風雅な生活が偲ばれて羨望を覚えまして御詩はあなたの細緻な詩論が裏づけされてゐるやうに思はれ深い味はひを喜びました。(瀧口武士) いづれも不相變磨かれたやうな作品その中に屢々現れてくる健康で新しい思考のや、道化した面貌がこの上ない魅力な ★

詩集青嵐・寡作玉什ヲ以テ鳴ル梶浦正之ノ近業三十余篇・澁キ傳統ノ金扇ヲ銀鱗ノ清流ニ映シ生カス現代詩性ノ昇華ハ颯爽タル青嵐ノ一陣ニ似タリ・外觀ハ四六倍大判・厚表紙・函入・内容紙百三十斤アト全模様二色刷・肖像印畫冬木皎之介作・著者筆蹟凸版入・最豪華版・限定二百部・頒價二圓送十四錢・刊行處・東京市麻布區霞町壹番地詩文學研究會客年十一月既刊・絶讚好評殘部僅少

★ 私に感じさせました矢張その精練された技術の壓力は到底詩壇の成上り詩人達の企圖し及ばないものと痛切に感じました貴下も小生も詩壇既に二十何年思へば苦しいながら實に懐かしい道です(村野四郎) 優雅に落附いた装幀何より楽しく僕の氣持からは「牡丹」のもつ内面的な光りと意念の妖しくいりまじつた詩法に驚きと敬意で満されました。あれだけの精神の神秘を完成するまでに「元朝の樂書」のしみじみとした美しい詩心と「湖心」のリンズムが追求せられたのではないかと思ひます。奥附のあの雅味ある装幀は印刷術の詩品だと思つてくりかへしあけてあります。

(川口敏男) 病床で何よりも楽しく拜見深い詩への情熱に對して敬意を示します特に貴下が散文詩の試作をなさいましたらと思ひます(菱山修三) 豪華な詩集兄が不斷の結晶たのしく拜見アトはききんですのによくこんなのが手に入りましたね(井上多喜三郎) 一生涯に一度でもこの立派な詩集が出て見たいと思ひます(水島秋夫) いつも乍らの嚴しい詩態、隙といふものを發見し得ない玉作のみ、日本に於ける近來の名詩集、時流便乗の押しつけがましい傷だらけの作品を羅列した近頃の多くの詩集など比較の限でないことを痛感(小池亮夫) 音楽の匂ひ溢れる豊かにして峻嶮な構成、抒情的な御作に至る迄、嬉しいと黙つて終ふ癖の私を極端に沈黙せしめるに充分でありました。(竹内一) △讀者の聲▽

木下夕爾詩集

田舎の食卓

序文 梶浦正之 △四六倍大判・舶來コットン・貳百部限定・定價六拾錢▽

花粉と蜜蜂に匂ふジャムの掌、巷の雨に落葉にヴィオロンを聴くヴェルレーヌの耳、そして仰角が碧空を截つたりブレンソードの泡沫に愛人の貌を幾何學的に見るエリュアールの眼、此處に蒐められた君の詩篇に、僕は之等西歐の歌人のすべてがあり、またすべてがないことを識る。何故なら、君はあの優れたる掌と耳と眼とを一度にこの田舎の食卓へ招待してゐるからだ。不幸にして僕たちは唯果實を皮ごと嚙る單調な一つの口より備へてゐないのを悲しむのであるが、この麗はしい君の饗宴の末席を占めることの欣びで一ぱいでゐる。しかも愉快なことは、この食卓の微笑の葩が疲れる頃には、爽やかなスコールを通過させるといふ君の詩法の秘密である。

正直、君のやうな新しい抒情性を完璧に近く体得した詩人が今日の日本に幾人あるであらうか。この一巻の詩篇は既に一家の風格を示してゐると斷言することは必ずしも過賞ではないのである。君の詩のよさが動かし難い一つのウニイックとして認識出來得ない人々と僕たちとは遠い距離に置かれてゐることを感ずるのであるが、君は寂寥を抱くに及ばない。大學・堀口氏が賞讃したごとく少數の確乎とした具眼者が嚴存してゐるのだ。そして更に現在僕等の周圍にも優れたる眼の多くが生れつつあるのだ。(かぢらら)

！ 得獲賞集詩回六第論汎藝文

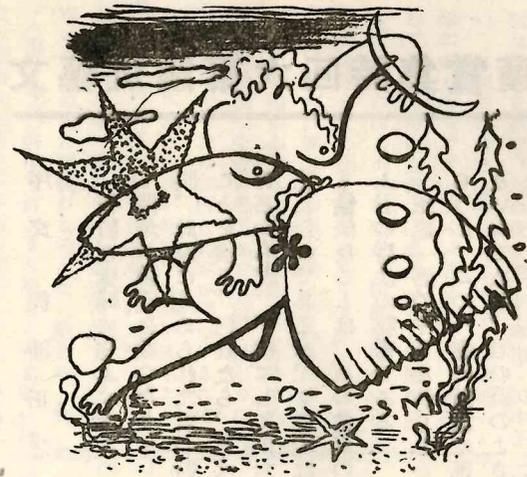
刊會究研學文詩

地番壹町霞區布麻市京東

西山五百枝
海洋詩集第二卷

★ 海洋底質

☆
☆



本書は著者の海洋第二詩集である。曩に東北書院發刊に係る「船」より距ること既に五年此處に筆硯新らたなる再襲の波浪を惹す。「日本の海洋文學の爲に一握の海底質を贈るのである」とより瘠薄なる底質の一片に過ぎないのである。だから此の上に滿々と厚沃なる海水を堪へられ、永久に見出すことさへ出来ない深海の底質片として没し去られる時が來れば幸なのである。速く日本海洋文學の海流を起して、全世界を環流させてもらひたいのである。」と著者は謂ふ。慎に海と生死を決する海洋詩人の面目躍如たるものが存在する異彩ある詩集である。

四六判・本製本・内容全アト紙・宮川蜻兒挿畫・定價壹圓參拾錢・送拾錢

詩文學研究會刊

東京市麻布區霞町壹番地

梶浦正之著

詩の原理と實験

★未だ嘗てなき現代詩の生きた新教科！

特長

(評家・讀者の讀後感を綜合して)

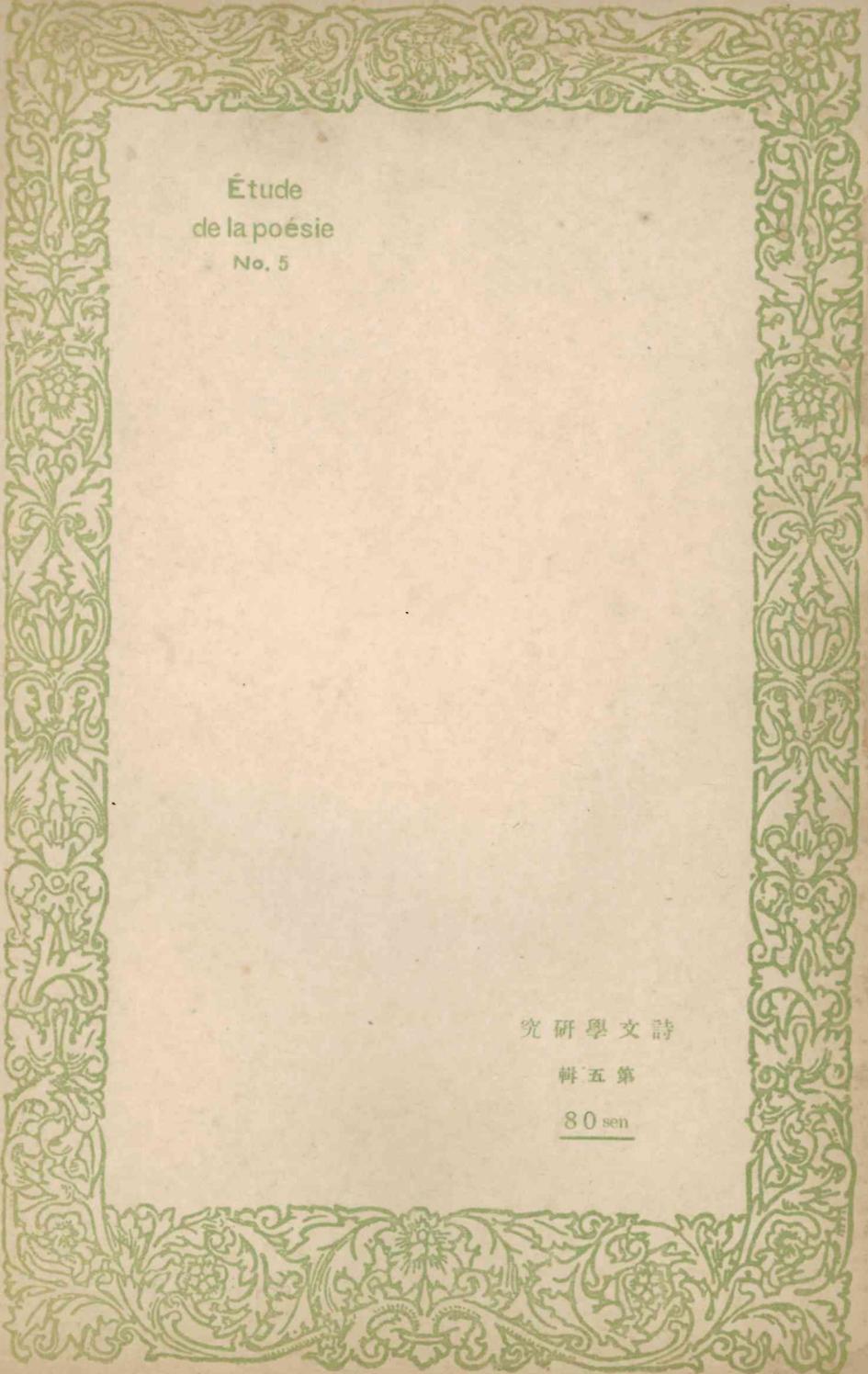
- 1 明確なる理論の体系組織
單に詩の局部門の研究を集成したるエッセイ集に非ず。如何にして讀者に詩の本体を認識せしめんかに最大の目的を注ぎ組織的に書き下したるもの。
- 2 實證實驗を基調とせること
所謂理論のための理論に墮せず。一言一句すべて科學的乃至心理學的實證實驗を伴つて書かれ、現代の詩歌人が今日直ちに詩作に活用出來得るもの。
- 3 文献の廣汎且つ正確なること
引用言辭の出典を一つ一つ懇切に註釋し、所謂學者的良心を以てせるもの。
- 4 論旨の簡單明瞭にして約要を得たること
尨大なる頁を要する文献に非ざれば到底之を顯し得ざる論旨を極めて巧妙に約要したるものなるが故に初學者と雖も容易に其の論旨を把握するを得る。

★本書の眞價は何よりも先づ讀者の聲に！

四六判厚紙・特別入美本・定價壹圓參拾錢・送料拾錢

詩文學研究會刊

東京市麻布區霞町壹番地



Étude
de la poésie
No. 5

詩文學研究

第五輯

80 sen